

高知県土佐山田町

原南遺跡発掘調査報告書

1 9 9 1 . 3

高知県文化財団

原南遺跡発掘調査報告書

序

高知県の文化財の保護，普及と啓蒙を目的とした財団法人高知県文化財団が平成2年3月に設立してより1年を迎えようとしています。私達は，先人の不断の営みの軌跡であり偽らざる歴史の証言者である文化財を保存，活用し，また後世に伝えて行くために日夜努力を重ねているつもりであります。本書のような報告書を刊行するのも，広く県民の皆さまに文化財の重要性を理解して頂き，その活用の便宜を計るための手段の一つであります。

本書に収めました「原南遺跡」は，平成2年度に発掘調査を実施した弥生時代を中心とする集落址であり，土佐山田町の原始社会の解明に資するのみならず高知平野全体の弥生社会の展開を理解するうえで重要な位置を占める遺跡であると確信致しております。本書が広く県民の皆さまの参考に供され，斯学向上と地域文化の発展にいささかでも寄与すれば幸いです。発掘調査を実施するにあたりまして，高知県立山田養護学校，高知県教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑の中で多くの方がたが熱心に作業に従事して頂きましたことを明記して，これらの人々に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人 高知県文化財団

理事長 中 内 力

例 言

1. 本書は、高知県立山田養護学校作業棟建設に伴う原南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 原南遺跡は高知県香美郡土佐山田町山田赤シサイ1160-1・1160-2に所在する。
3. 調査面積は、924㎡（試掘調査24㎡，本調査900㎡）である。
4. 調査期間は、試掘調査が平成2年6月26日～6月28日，本調査が同年8月1日～8月31日及び10月26日～11月1日である。
5. 発掘業務は、高知県文化財団が高知県教育委員会から委託を受けて実施した。
事務局 筒井作郎（高知県文化財団総務課長）
岡崎康明（〃文化財団総務課）
調査員 出原恵三（〃教育委員会文化振興課主幹）
6. 本書の執筆・編集は、出原恵三が行った。
7. 現場作業及び実測図作成等においては、小松幹典・山下英雄（高知県教育委員会）
中山泰弘（土佐山田町教育委員会）、浜田雅代・宮地佐枝氏の協力を得た，記して謝意を表したい。
8. また、現場作業においては、8月26日高知県立高知追手前高校教諭高橋啓明氏引率のもとに、同校生徒10名の協力を得た。

2年8組	長 裕美	2年10組	安岡 美穂
〃	小田々みどり	〃	西田 直子
2年10組	矢野久美子	〃	岡林 美樹
〃	増吉 理恵	〃	入野 明美
〃	山本 愛	2年4組	上村 孝文

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の経過及び方法	4
第Ⅳ章 調査の成果	9
1 基本層序	9
2 検出遺構と遺物	9
(1) 弥生時代	9
(2) 古代・中世・近世の遺構と遺物	17
(3) 遺物包含層出土の土器	20
第Ⅴ章 考察	24
観察表	28

挿 図 目 次

Fig 1	土佐山田町の位置図	1
Fig 2	周辺の主な弥生時代～古墳時代初の集落遺跡	3
Fig 3	発掘作業風景	4
Fig 4	遺跡の位置図	5
Fig 5	基本層序	6
Fig 6	原南遺跡検出遺構全体図	7
Fig 7	S T 1 実測図及び遺物出土位置図	10
Fig 8	S D 1 実測図	11
Fig 9	S B 1 実測図	13
Fig 10	S T 1, S D 1 (東側) 出土土器実測図	14
Fig 11	S D 3 実測図	15
Fig 12	S D 1 (西側) 出土土器実測図	16
Fig 13	S K 1・2 及び S D 1 出土の中世土器	17
Fig 14	S K 1・2・4・6 実測図	18
Fig 15	P 14・63 出土土器実測図	19
Fig 16	S D 2 実測図	19
Fig 17	S E 1 実測図	20
Fig 18	遺物包含層出土の弥生土器	21
Fig 19	遺物包含層及び S D 2 出土の土器	23

写 真 目 次

PL 1	調査前の全景（北西から）	35
	完掘状態（東側半分）	35
PL 2	完掘状態（西側半分）	36
	完掘状態（仮設校舎部分）	36
PL 3	S T 1	37
	S T 1（仮設校舎部分）	37
PL 4	S D 1 東側半分（西から）	38
	同（東から）	38
PL 5	S D 1, B-B' バンクセクション	39
	同A-A' バンクセクション	39
PL 6	S D 1 土器出土状況	40
	同	40
PL 7	S D 1 土器出土状況	41
	同	41
PL 8	包含層（IV層）出土の土器	42
	S K 2	42
PL 9	S E 1	43
	S E 1	43
PL 10	土器出土状況	44
PL 11	出土土器写真図版	45
PL 12	同	46
PL 13	同	47
PL 14	同	48

第I章 調査に至る経過

高知県立山田養護学校は、土佐山田町精薄児育成会、土佐山田町立養護学校を経て昭和44年に高知県に移管され小学部、中学部の計6学級で発足し、以後児童・生徒数の増加に伴い施設の拡充に努め昭和55年には高等部を設置するに至った。同年10月高等部校舎の基礎工事中に弥生土器・土師器・須恵器などが出土したことにより、高知県教育委員会は工事を一時中止させ緊急発掘調査を実施したところ、弥生時代中期の溝や古墳時代後期の土坑などが検出された。遺構は周辺にも広がっていることが考えられたので、ほぼ学校敷地内全域を原遺跡と命名した。その後も体育館（昭和56年）、プール（昭和57年）建設に際しても緊急発掘調査を実施し、同様の結果を得ている。今次調査の対象となった原南遺跡は、原遺跡に南接するが原遺跡よりも3m程低い位置にあるため遺跡の範囲から除外されていた。しかし昭和64年、平成元年度に香美・長岡郡下を対象に実施した分布調査の際には、須恵器・土師器などの表採資料を得ることができたために原南遺跡と命名し遺跡登録を行ったのである。

今次調査は、同校の木工・工作などに使用している作業棟が狭隘となり、作業に支障をきたすようになった為、平成2年度事業として作業棟を新設することになった。その場所として原南遺跡の一部が選地されたのである。これを受けて文化財保護部局である高知県教育委員会文化振興課は、建設部局である同総務課及び同校と協議を重ねた結果、記録保存の為の緊急発掘調査を実施することになったのである。先ず6月に試掘調査を実施したところ、遺物包含層や遺構の存在が確認され、建設予定地のほぼ全面を発掘調査する必要があるとの結論に達した。そして高知県文化財団が本発掘調査の委託を受け、8月1日より実施することになったのである。

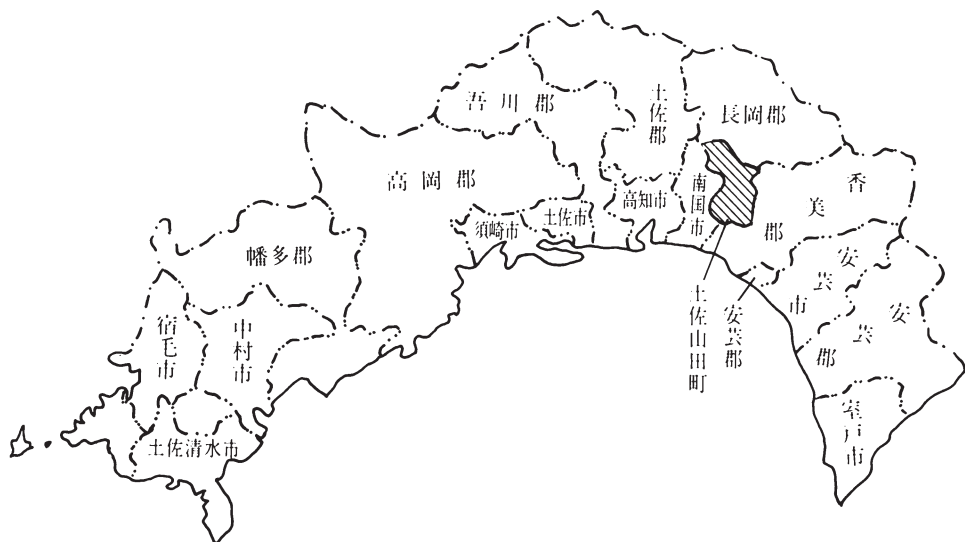


Fig 1 土佐山田町の位置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

原南遺跡は、香美郡土佐山田町山田赤シサイにあり、標高29.4m、海岸線からの距離は7kmを測る。土佐山田町は、南国市と共に県下でも有数の遺跡密集地帯であり平成元年に実施された分布調査によると縄文時代早期から近世に至る200箇所近くの遺跡が確認されている。土佐山田町は、面積の約8割が山地であるが、南国市と接する南部に平野部が開け県下最大の穀倉地帯である高知平野に連なっている。この平野部は地形上大きく3つの段丘から成っている。最も高位の段丘は、現市街地から長岡台地に伸びる古期扇状地であり標高50mを測る。その下段に約10m前後の比高差を保って東西に帯状に走る新期扇状地が発達している。原南遺跡に北接する弥生中・後期の集落址である原遺跡や東方約1.2kmにある稲荷前遺跡は、この中位の段丘面に営まれている。原南遺跡は、中位の段丘より更に低位に形成された新期扇状地の上に載っている。これらの段丘は、土佐山田町の東端を南北に流れ土佐湾に注ぐ一級河川物部川によって形成されたものである。この物部川は、河口付近で幾つもの自然堤防を形成し、弥生時代では南四国最大の拠点集落である田村遺跡群を育んでいる。

土佐山田町における弥生時代の遺跡は、現在のところ中期末（畿内第4様式併行）から確認されており、それ以前のは未発見である。原南遺跡より東北方向に約20kmの地点、標高120mの物部川中流域の河岸段丘上には、前期末の美良布遺跡⁽¹⁾が知られているところから、土佐山田町においても前期以来の展開が当然予想される場所である。むしろ中期末から弥生時代の遺跡が一般化することは、当該期が土佐山田町における弥生集落の展開の一つの画期として理解すべきであろう。中期末の遺跡は、先に挙げた原遺跡や稲荷前遺跡の他に洞穴遺跡として著名な龍河洞遺跡⁽²⁾がある。原遺跡は、標高32m前後を測り当遺跡との比高差は3mである。昭和54・56年の調査で、中期中葉～末の竪穴住居と溝（SD1）などが検出されている。この中でSD1は、調査区の関係から長さ8mを調査したにすぎないが、幅3m、深さ1.4mを測るところから調査担当者は集落を囲む環濠の一部ではないかとしている⁽³⁾⁽⁴⁾。稲荷前遺跡は平成元年に調査が実施され、中期末の竪穴住居址1棟の他土坑などが検出されている⁽⁵⁾。龍河洞遺跡は、鍾乳石にまかれた「神の壺」（弥生後期）で有名であるが、中期末から生活の址が認められ洞穴内には、炉址や獣骨などが検出されている。これらの諸遺跡は、何れも小集落かキャンプ地的なものであり後期まで営まれているが、古墳時代まで存続することはない。古墳時代になるとそれまでの集落は一斉に廃てられ、平野部では最も高位の古期扇状地に移動する。その代表的な例がひびのき遺跡⁽⁶⁾、ひびのきサウジ遺跡⁽⁷⁾、林田遺跡⁽⁸⁾などであり、弥生時代の集落に比べると規模も大きくなり数多くの鉄器を有するようになる。しかし現状では、古墳時代前・中期に属する集落は未確認である。後期になると大塚古墳をはじめとする中・小の円墳が周辺に築かれるようになり、7世紀には平野北辺の山麓を中心に須恵器や瓦の窯が出現するようになり、以後奈良時代をとおして土佐の須恵器生産の中心地となる。



番号	遺跡名	時期	番号	遺跡物	時期
1	田村遺跡群	前期～後期	9	金地遺跡	後期
2	野口遺跡	後期～古墳初	10	二島遺跡	中期～後期
3	下分遺跡	前期～中期	11	原南遺跡	〃
4	上細二瀬遺跡	後期	12	原遺跡	〃
5	平杭遺跡	〃	13	稲荷前遺跡	〃
6	大北遺跡	〃	14	ひびのき遺跡群	後期～古墳初
7	深淵遺跡	〃	15	林田遺跡	〃
8	野村丸遺跡	〃	16	龍河洞洞穴遺跡	中期～後期

Fig 2 周辺の主な弥生時代～古墳時代初の集落遺跡

第三章 調査経過

(1) 試掘調査

原南遺跡は、平成元年度に実施した遺跡分布調査で明らかになったものであり、北接する原遺跡と関連のある遺跡であることは予想できたが、正確な範囲や遺物包含層や遺構の有無、あるいは深度等については全く不明であった。従って新校舎建設予定地内(1,100㎡)で、仮校舎が建っている場所(240㎡)以外のところに2m×2mの試掘グリッドを6個設け試掘調査を実施した。その結果各グリッドより、地表下30～50cmのところで古代～中世のピットや遺物包含層が認められた。更に下層からは弥生時代の遺物や弥生後期に埋没したと考えられる溝なども検出できた。これによって、新校舎建設予定地を含む周辺の地域は、弥生時代中期～中・近世に至る集落址であることが明らかとなり、新校舎建設予定地は全面発掘調査を実施することが必要であるという結論に達した。

(2) 本調査

本調査は、仮校舎が建っている調査区南部以外の場所について平成元年8月1日から8月31日まで実施し、更に仮校舎除去後10月26日から11月1日まで実施した。8月の調査は、廃土置場の関係から調査区を東西に2分し、東側半分を先に調査して廃土を西側に置き、その後廃土を東に移して西半分の調査を実施した。先ず重機で表土層である旧耕作土を除去した後、手作業で遺物包含層を下げ、遺構検出に努めた。出土遺物の取り上げ及び検出遺構の記録は、任意に磁北を基軸とする4mグリッドを設定して実施した。基本層序については、調査区北辺と東辺の地層断面を記録した。また調査区北端において、近世の井戸(SE1)を検出したが、検出面より2.5m掘り下げた地点で、作業上安全を確保することが困難となったために、やむを得ず2.5mから下の調査は断念せざるを得なかった。

仮校舎設置場所の調査も同様の方法で実施した。



Fig 3 発掘作業風景



Fig 4 調査区位置図

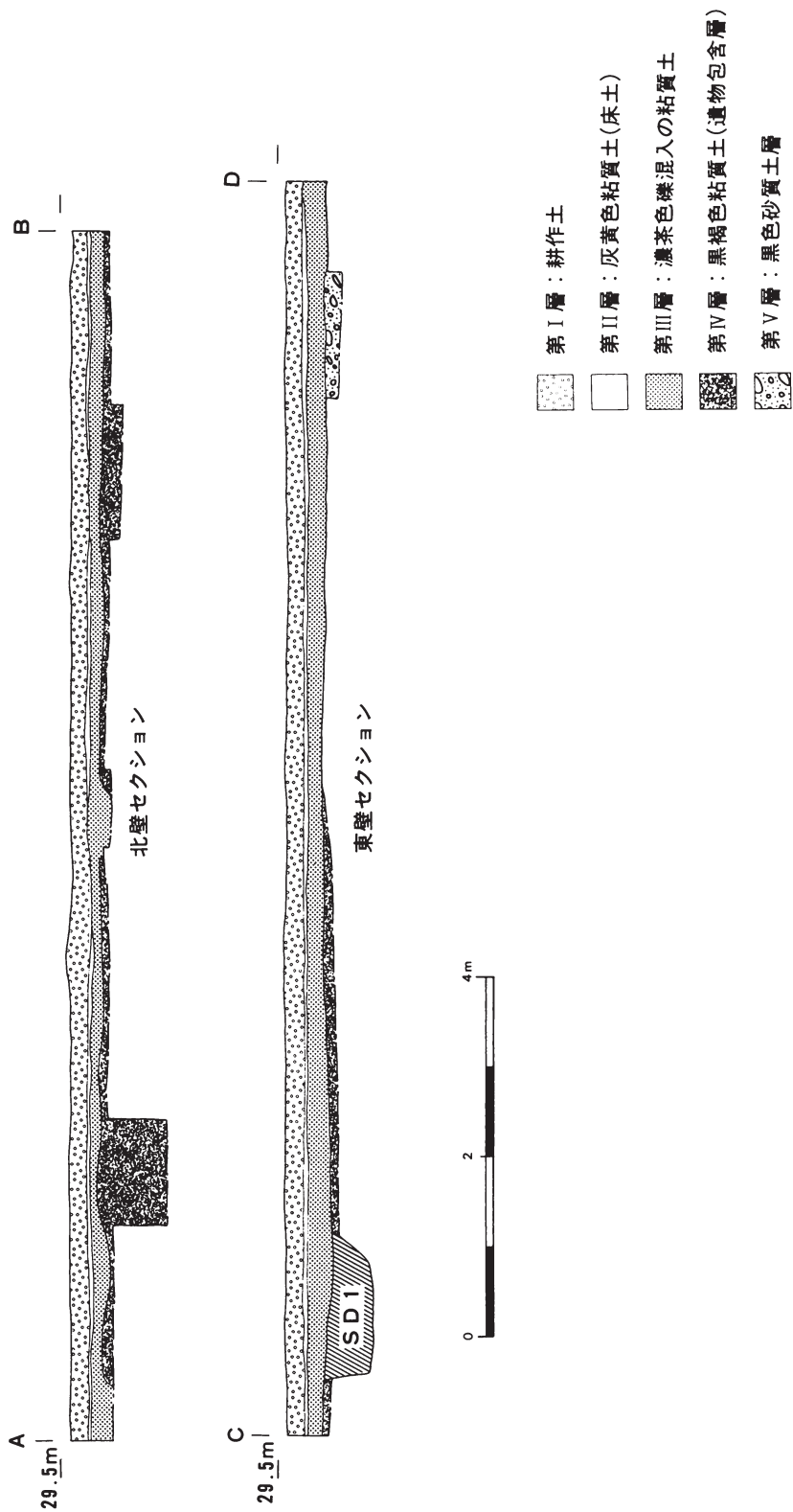


Fig 5 基本層序

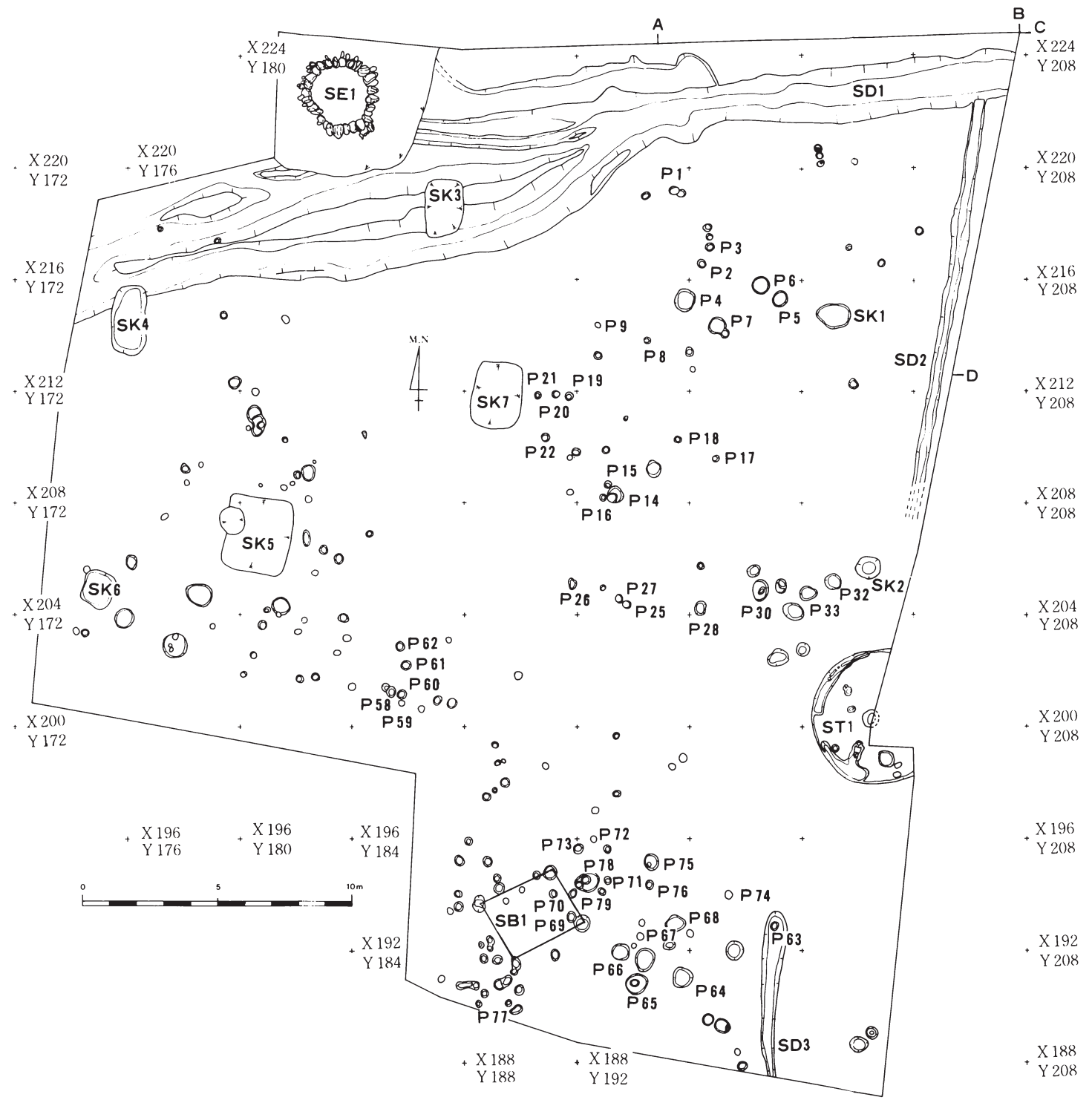


Fig 6 原南遺跡検出遺構全体図

第Ⅳ章 調査の成果

1 基本層序 (Fig 5)

基本層序は、Ⅴ層からⅠ層で構成されている。このうちⅢ層～Ⅰ層は水平な堆積をしているが、Ⅴ・Ⅳ層にはかなりの起伏が見られる。以下層準ごとに説明したい。

Ⅴ層：黒色砂質土層で、ST1など弥生時代の遺構検出面となっている。調査区全面には広がらず、北壁より南へ10mのあたりから南に堆積している。層厚は、0～20cm程で無遺物層である。Ⅴ層の下には黄色シルト層が堆積している。

Ⅳ層：黒褐色粘質土で上層部は、弥生時代の遺物包含層である。調査区北辺部に厚い堆積が見られ、北壁断面下では1m以上の層厚を形成している。この層準は、火山灰と腐食土層が混ざった土層で、段丘下の深い凹地に厚く堆積し、南へ向うに従って漸次厚さを減じ調査区南部ではⅣ層の堆積は認められない。弥生後期及び古代・中世の遺構が掘り込まれている。

Ⅲ層：1～5cm大の小礫混入の濃茶色粘質土で、10～25cmの層厚を形成して調査区全面に堆積している。古代～中世の遺物を包含している。

Ⅱ層：旧水田耕作土の下に形成された黄灰褐色の床土である。部分的に認められないところもあるが、0～5cmの層厚を保ってほぼ全面に堆積している。

Ⅰ層：旧水田耕作土で、現地表を形成している。

2 検出遺構と遺物

(1) 弥生時代

ST1 (Fig 7・10)

ST1は、調査区の東端にあり約3分の1が調査区外に出ているが、直径約4.4mを測る円形竪穴住居である。壁の残存高は北側で25cm、南側で15cmを測る。床面は平坦であり、北西部分に幅10～20cm、深さ6cm前後の壁溝が長さ1.7m掘られている。壁溝の南端には、長径20cmの楕円形の小ピットが2個あり、壁溝床面からの深さは南のものが4cm、北が10cmを測る。中央ピット(P1)は、完掘するには至らなかったが長軸55cm、短軸50cm程度の隅丸方形プランを有するものと考えられる。断面は逆台形状で、深さは20cmを測る。主柱穴は、位置や深さから考えてP2(18×30cm、深さ36cm)、P4(径30cm、深さ38cm)と未調査区に2柱穴存在する4本の主柱を想定することができる。この他壁に沿うかたちで浅い掘り込みが2箇所認められる。1つは壁溝と一部重複しており幅35cm前後、深さ5cm、長さ2.2mを測る。他の1つは壁側から中心に向いてT字状に掘られた凹みで深さは5cm内外である。またP5の横にも1辺53cm、深さ5cmを測る隅丸方形の凹みがあるが性格は不明であり、遺物も出土していない。

遺物は、土器と円礫が床面及び埋土中より出土している。1は壺の口縁部で床面より10cm浮いて出土している。ラッパ状に開く口縁を有し、外面には扁平な粘土帯を貼付している。口唇

部は面をなし、下半に右上りの刻目を施している。2も埋土中より出土した甕である。胴部中位以下を欠くが、上胴部から頸部に向かって窄まり口縁部は大きく外反している。口縁部外面には扁平な粘土帯を貼付し、口唇部は横方向のナデにより僅かに凹状を呈している。上胴部外面には指頭でつまんだ小突帯を貼付、胴部内面は指頭によるナデ、圧痕が顕著に見られる。胴部外面は、全面が煤けている。土佐型甕に属する⁽⁹⁾。4は、P6検出面直上で出土した小型の甕で下膨れの胴部から口頸部が外反、口唇部は丸くおさめている。内外面に指頭によるナデ調整が顕著に見られる。5も甕であり床面から7cm浮いて出土している。口縁部はく字状に外反し、内外面を横方向にナデる。わけても口唇部上端を摘まみ上げて横方向に強くナデるために口唇部及び口縁端部が凹状をなす。横方向のナデは頸部内面にも及び胴部との間に稜をなしている。3は高坏脚部で、床面の3箇所から出土したものが接合した。脚端部は2条の凹線が巡り、内面も強い横方向のナデにより凹状をなす。脚部内面は左←右のヘラ削り、外面は縦方向のヘラ磨きが施される。

坏底部は円盤充填による。円盤は2個出土しており共に床面に付いている。S-1は、P6の60cm西にあり、砂岩で20×18cm、厚さ6.6cmを測る。上面は平坦で磨耗しているところから砥石として使用された可能性もある。S-2も砂岩で18×9cm、厚さ14cmを測るが、使用痕は認められない。S-T1は、甕2のように古く見なければならぬ土器も出土しているが、床面出土の高坏脚部3などからIV様式後半（田村中期Ⅲ-後半）⁽¹⁰⁾に時期比定することができる。

SB1 (Fig 8)

調査区南端に位置する1間×1間の掘立柱建物である。柱間距離はP1-P2

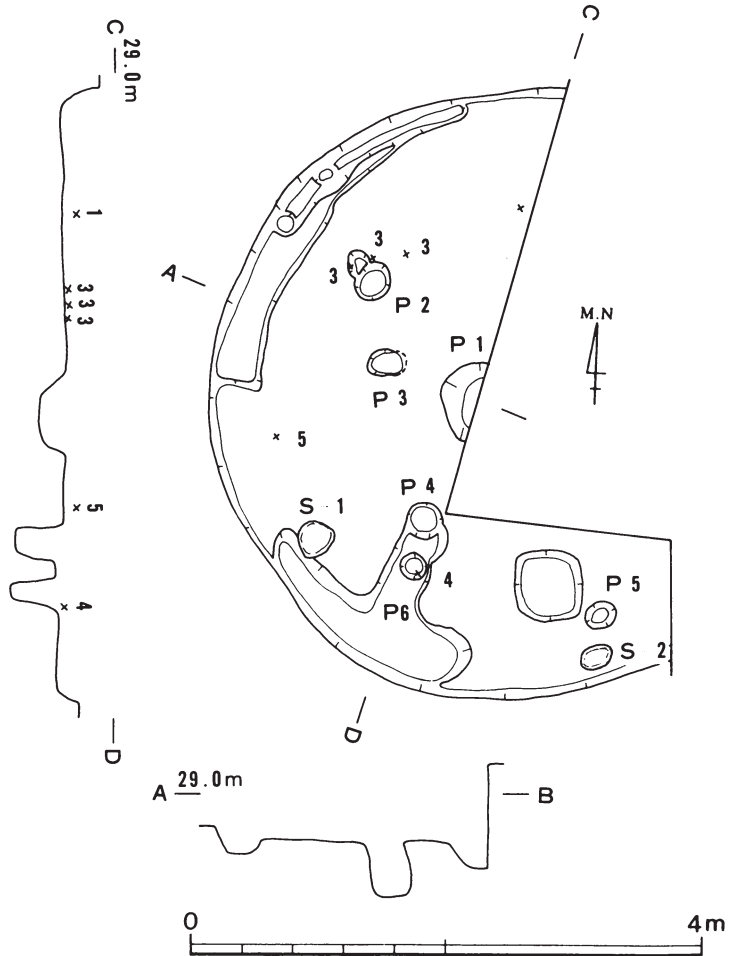


Fig 7 ST1 実測図及び遺物出土位置図

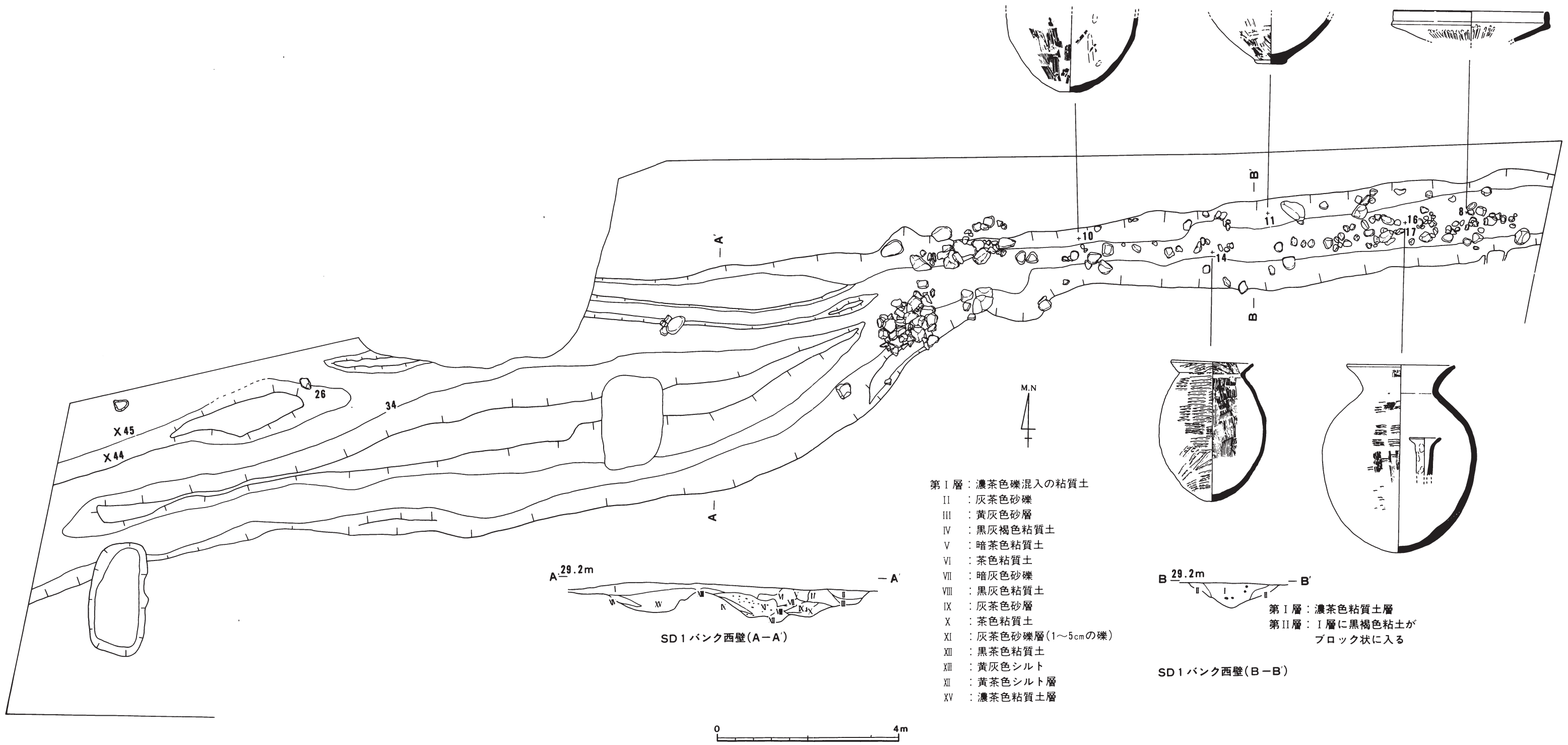


Fig 8 SD1 実測図

が2.2m, P 2 - P 3 が2.75m, P 3 - P 4 が2.5m, P 4 - P 1 が2.75mを測る。面積は約6.6㎡柱穴規模は, P 1 が52×60cm・深さ30cm, P 2 が径50cm・深さ18cm, P 3 が40cm×60cm・深さ20cm, P 4 が50cm×30cm・深さ20cmである。遺物はP 1 とP 2 から弥生中期末の土器細片が出土している。S T 1 とほぼ同時期に営まれたものと考えられる。

S D 1 (Fig 8・10・12)

調査区北部を東西に走る溝で, 延長約34m・幅1.3～6.0m以上, 深さ20～80cmを測る。調査区の東半分程は整然とした1条の溝であるが, 中央部の南壁集石あたりから西は大きく2つに分かれており埋土の堆積も複雑になっている。また東側半分の埋土(B-B')はI層(濃茶色粘質土)とII層(I層に壁の黒色粘質土がブロック状に入る)からなるが, 西側の埋土(A-A')は, 砂や礫が複雑に入り混っている。ただ分岐した南の溝は, B-B' と類似した堆積を示している。しかし後述するように出土遺物を見ると攪乱か2次的な堆積を考えなければならない。更に東半分と西半分の違いとして, 東半分は拳大から人頭大の河原石が数多く投げ込まれているのに対して, 西半分にはそれが全く認められない。溝埋没過程の相違を如実に示している。溝の深さは, 先述のとおりで検出面の削平などにより地点によってかなり異っているが, 底面の標高を見ると東端部で28.62m, 中央部分岐付近で28.35m, 西端で28.29mを測ることから東から西に傾斜する溝であることがわかる。

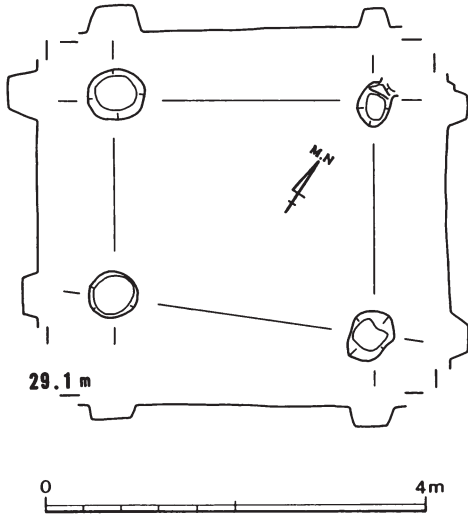


Fig 9 SB1 実測図

出土遺物は, 多量の弥生中・後期土器と数点の中世土師器が見られる。出土状況としては, 東半分が少量の中期土器を含みながらも14・17のような復元完形の後期末の土器が主体を占めているのに対して, 西半分は砂礫層中より比較的少片となった中・後期の弥生土器が混在して出土している。更に西端部からは中世の土師器が3点出土している。このようにS D 1 は, 遺物の出土状況からも東と西で大きな違いが認められる。

次に個々の土器について, 東と西に分けて観察することにする。東側半分から出土した土器は, 6～17である。6は口縁部の発達した壺である。ラッパ状に大きく外反し端部近くで僅かに内湾している。内外面ハケ調整を行う。7・9は甕口縁部であり, 前者は丸味を帯びて外反するが後者は内面に稜をなす。共に「口縁部叩き出し技法」⁽¹¹⁾によるが, ハケで叩き目を消し

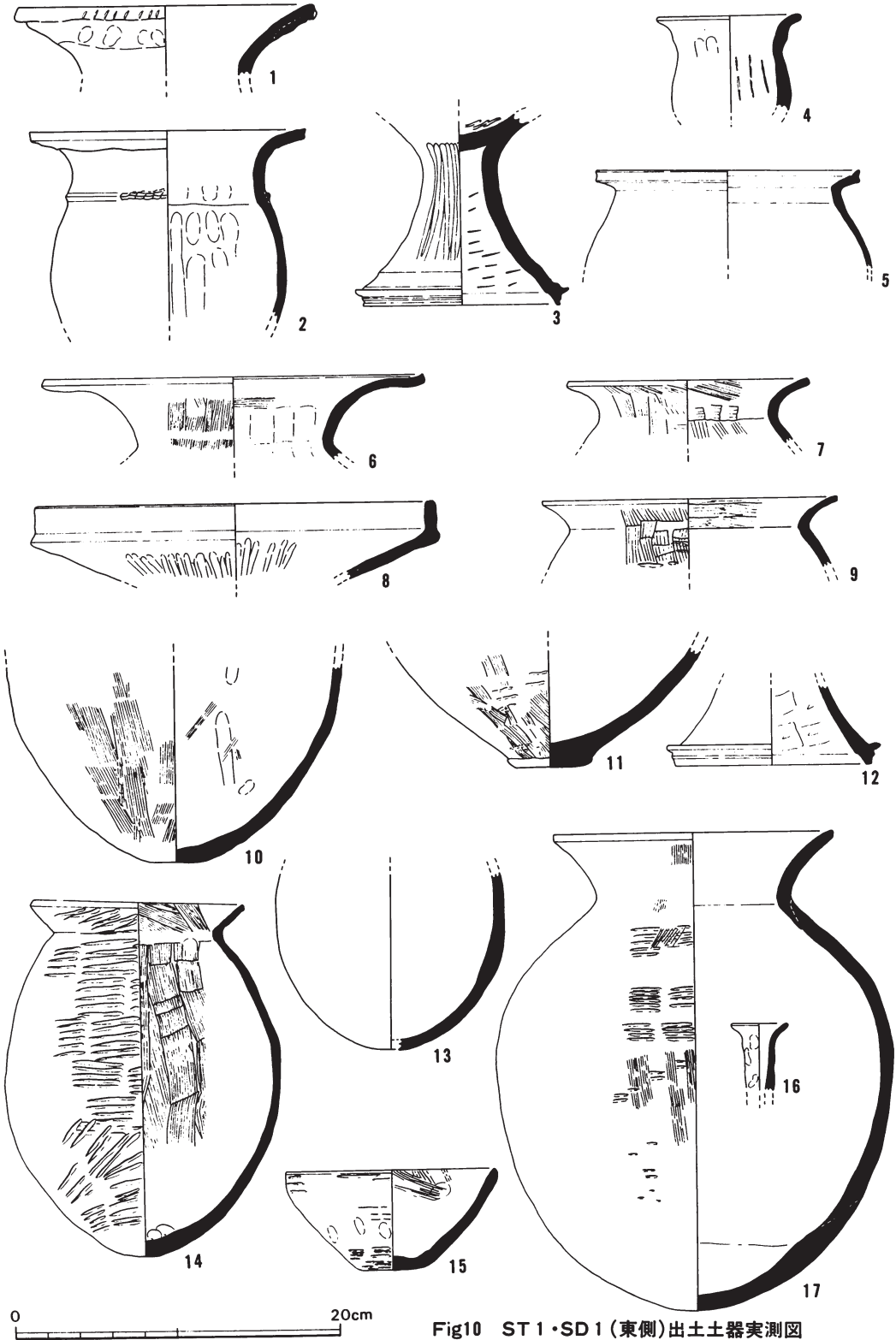


Fig10 ST1・SD1(東側)出土土器実測図

ている。10・11・13は甕底部で、10・13は丸底に近く、11は僅かに突出気味の底部を有している。14・17は復元完形の甕である。14は砲弾形の胴部を有し僅かに平底が残る。口縁部はく字状に外反し、屈曲部内面には面が生じている。胴部外面の下部3分の1は右上り、それより上は水平の方向の叩き目が見られ、分割成形のあとをとどめている。口縁部も叩き出しによっている。17は丸底で球形に近い胴部を有し、口縁部はく字状に外反し比較的長く伸びる。胴部外面は水平の叩きを施し部分的にハケ調整を行う。口縁部は粘土帯の接合部を明瞭に観察することができる。15は完形鉢で、全面叩き成形、しっかりした底部から僅かに内湾気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。16はミニチュアの長頸壺の口頸部と考えられる。17の破片中に重なって出土しているところから17の中に入っていた可能性もある。8は高坏坏部で、口縁部は直立し、屈曲部が外方に張り出している。内外面丁寧なヘラ磨きをほどこしている。12は高杯脚部である。端部は、上方に拡張し2条の凹線文が施され、内面は左←右のヘラ削りである。8と12が中期末～後期初めの土器である以外は、すべて後期末に属する。

西半分出土の土器は、11と後述する中世の土師器59～61以外はすべて砂礫層中より出土している。18～21は壺の口縁部である。18は強く外反する口縁部で、口唇部には2条の退化した凹線文を巡らす。19はラップ状に外反する口縁部を有し、頸部との接合部で剥離している。口唇部は上下に拡張され3条の凹線文が巡る。内面にはヘラ磨きが施される。20は口縁部に厚い粘土帯を貼付し指頭で押圧している。口唇部にはヘラで斜格子文を施している。21は、Ⅱ層から出土している。長い頸部からラップ状に外反する口縁部を有し、口縁部外面に粘土帯を貼付している。口唇部は凹状をなし刻目を配している。22・24・25・26・27は甕である。22は口縁部がく字状に外反、口唇部に向かって厚くなり口唇部には2条の擬凹線文を巡らす。口縁部外面及び口唇部は煤けている。24・25・26・27は口縁部叩き出しで、内面に稜をなしてく字状に外反、24・25の口唇部は面取っている。26の胴部外面は水平方向の、27の胴部外面は中位が水平方向、上位は左上りの叩きが施されている。内面は共にハケと指頭による強いナデ調整が施されている。34・36は甕底部で、共に外面には叩きが施され、34・35は突出した底部である。30～32・37～39も底部である。32の外面には縦方向のヘラ磨きが、38はハケ調整が施されている。33はコップ状の鉢で、叩き成形、内面はハケ調整が施されている。28と40は高坏脚部である。28は端部に2条の凹線文が巡り、内面は左←右のヘラ削りが施されている。40は厚手の作りで端部には2条の擬凹線文、外面はハケ調整の下

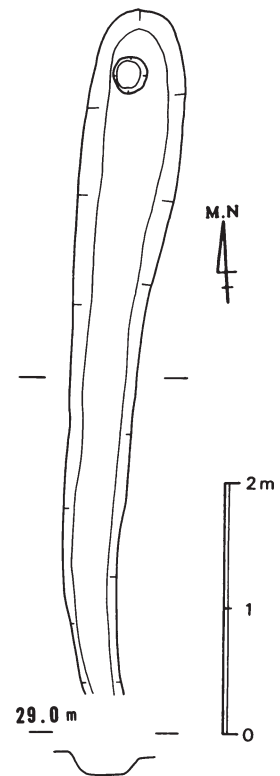


Fig11 SD 3 実測図

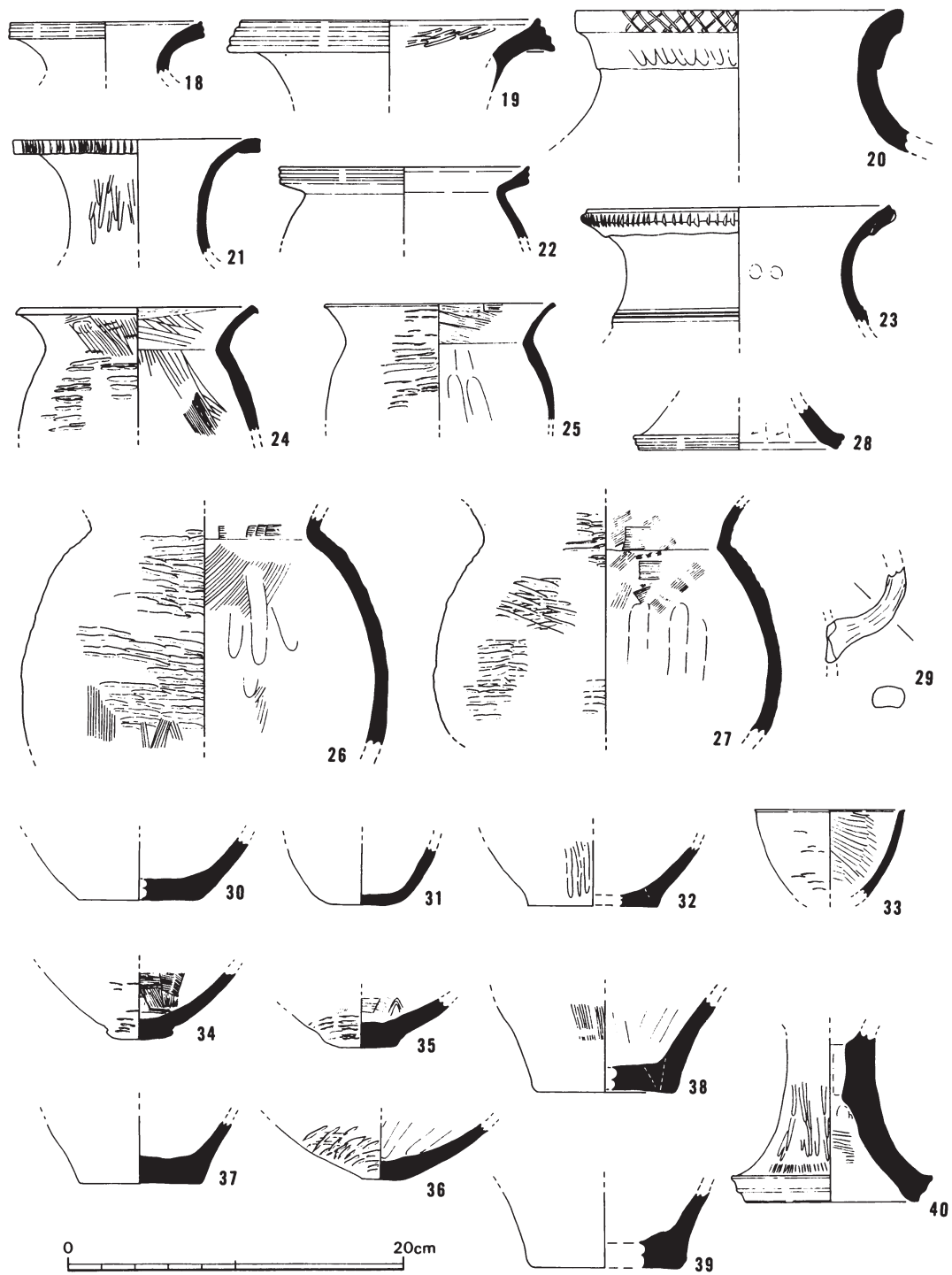


Fig12 SD1 (西侧)出土土器实测图

地の上にヘラ磨きが施されている。29は把手で、断面は隅丸方形と呈する。以上SD1出土の土器について述べたが、土師器については中世の頁で述べる。

SD3 (Fig11)

調査区南部にあり一端が調査区外に出ている。ほぼ南北に走る溝で長さ54m、幅30～80cm、深さ7～9cmを測る。南に向かって幅を減じている。埋土は小礫混ざりの黒色粘質土単純一層である。北端床面を中世のピットに切られている。埋土中より弥生中期土器(9)が出土している。9は甕で、櫛描直線文を巡らした上胴部から口頸部が大きく外反する。口縁部には粘土帯を貼付し口唇下半に刻目を施している。

(2) 古代・中世・近世の遺構と遺物

SK1 (Fig13・14)

SK1は、調査区の北東にある。長軸1.24m、短軸86cm、深さ5～9cmを測る不整形の土坑である。埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。遺物は埋土中より土師器坏(41)が出土している。41は僅かに内湾気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。内面にロクロ目が顕著に残る。この他に中世土器の細片が5点出土している。

SK2 (Fig13・14)

SK2は、調査区の東端にある。長軸90cm、短軸80cm、深さ35cmを測る隅丸方形の土坑である。断面はU字形を呈し、埋土はI層(濃茶色粘質土)、II層(濃茶色砂質土層)からなる。底面には人頭大の角礫が置かれている。遺物は埋土I層から須恵器坏(42)が出土している。42は小振りの坏で底部にヘラ切り痕が顕著に残り、底部外縁を斜めに削って面取っている。内底及び体部内外面は横ナデを施す。7世紀代に属する。この他須恵器の細片が3点、土師器の細片が5点出土している。

SK4 (Fig14)

SK4は、調査区の西端にありSD2を切っている。長軸2.1m、短軸1.1m、深さ32cmを測る隅丸長方形の土坑であり、断面は逆台形状をなしている。埋土は灰茶色粘質土で遺物は認められない。

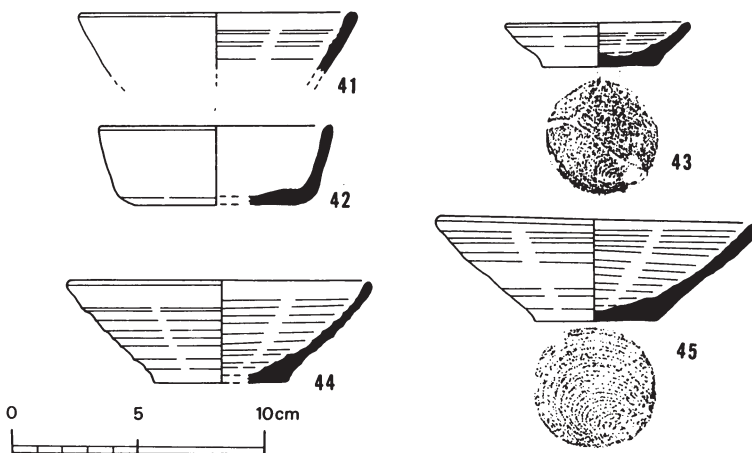


Fig13 SK1・2及びSD1出土の中世土器

SK 6 (Fig14)

SK 6は、調査区の南西隅にある。長軸1.22m、短軸1.06m、深さ5cmを測る隅丸方形の土坑である。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で、図示し得るものはないが須恵器の細片1点と土師器細片6点が出土している。6～7世紀に属する。

土坑は、以上の他にSK 3・4・7があるが、これらは近世以降の攪乱坑であるために、ここでは割愛する。

SD 2 (Fig16・19)

SD 2は、調査区の東壁に沿って南北に伸びる溝であるが、その両端を明らかにすることができなかった。長さ14m以上、幅は40～50cm、深さは10～15cmで、南から北に向かって緩傾斜している。埋土は濃茶色粘質土単純一層である。遺物は青磁碗底部(71)が出土している。71は厚い底部で、畳付けは丸い。外底以外は全面施釉し、外底露胎部は僅かに褐色に発色する。

SD 1 出土の中世遺物 (Fig13)

SD 1は先述のように弥生後期の溝であるが、西端部床面より土師器坏が3点(43・44・45)出土している。3点は近接して出土しており、SD 1を切る中世の土坑が存在したと考えられるが、プランを検出することはできなかった。43は、小坏で口縁部は丸くおさめ、内外面ロクロ目が顕著である。44・45も坏で、比

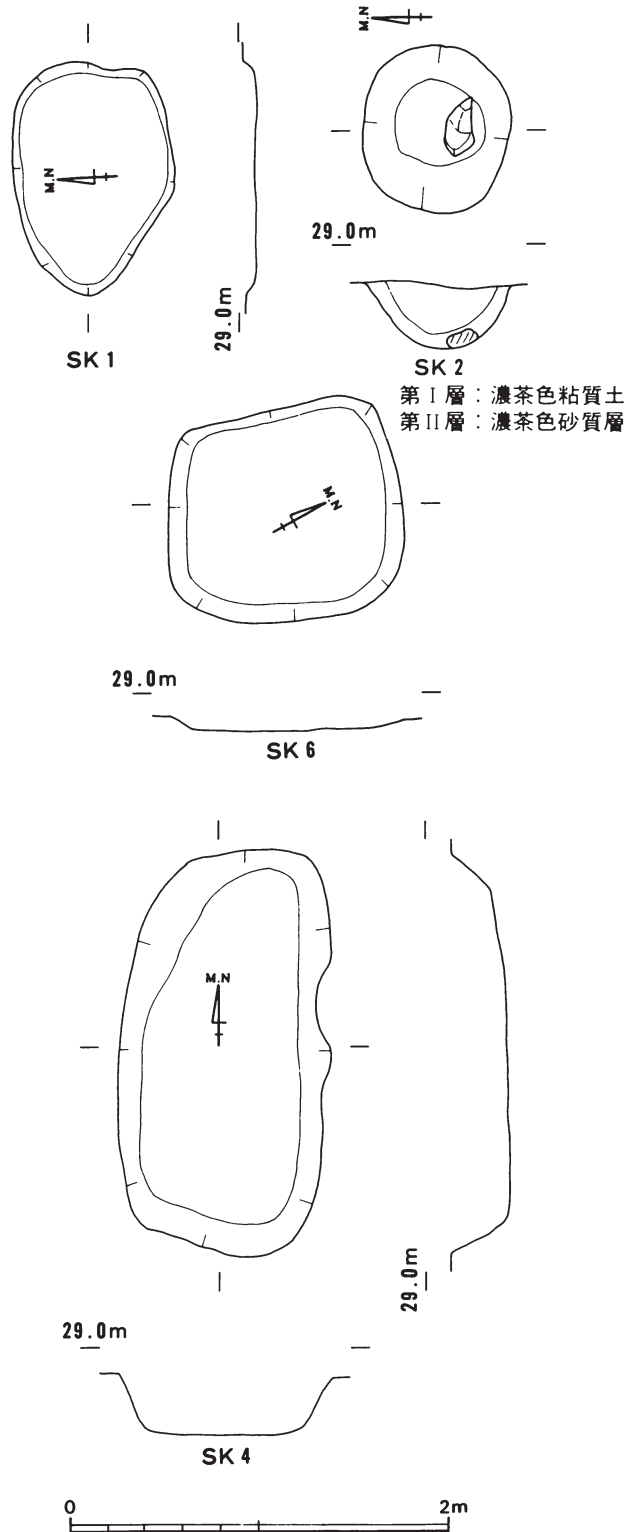


Fig14 SK 1・SK 2・SK 4・SK 6 実測図

較的大きな底部から内湾気味に立ち上がり口縁部は丸くおさめる。内外面は共に密なロクロ目
が認められる。底部は糸切りである。15世紀に属する。3点は、遺構
を明らかにできなかったが一括遺物と考えてよからう。

ピット (Fig15)

ピットは、大小200個余り検出しており、そのほとんどが古代中世
の柱穴と考えられる。しかし位置関係から掘立柱建物などを復元でき
るものはない。遺物も49個から土師器・須恵器の細片が出土している
が、図示可能な土器はP14出土の土師器碗底部(46)とP63出土の須
恵器坏蓋(47)のみである。ピットの規模・時期については一覧表を
作成した。47は内外面横ナデ調整で端部は丸くおさめている。

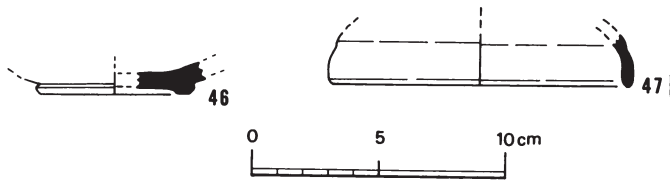


Fig15 P14・P63出土土器実測図

ピットNo.	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	ピットNo.	長軸×短軸 (cm)	深さ (cm)	時期
1	径31	30	中世	32	57×55	16	中世
2	28×26	28	〃	33	64×50	15	不明
3	32×28	28	古墳	58	33×28	19	中世
4	80×70	9	中世	59	径30	21	〃
5	55×50	7	〃	60	〃29	18	不明
6	64×58	5	弥生	61	〃30	12	中世
7	61×58	8.5	〃	62	〃30	21	不明
8	25×20	18	古代	63	〃28	3	7世紀
9	径21	54	〃	64	85×70	14	中世
10	36×32	8	中世	65	80×74	24	〃
14	59×58	36	〃	66	63×59	12	〃
15	31×27	9	〃	67	30×24	37	〃
16	径20	10	〃	68	80×60	11	古代
17	28×24	13	〃	69	35×32	34	中世
18	径24	11	〃	70	径28	25.5	〃
19	〃20	13	〃	71	32×25	19	古代
20	〃32	29	古代	72	径26	25	中世
21	〃20	12	不明	73	30×28	23	〃
22	〃25	35	古代	74	径27	32	〃
25	30×25	10	不明	75	60×52	35	〃
26	37×25	7.5	中世	76	30×29	30	15世紀
27	29×25	18.5	〃	77	径26	25	〃
28	55×40	21	不明	78	34×29	17	中世
30	75×55	12	中世	79	95×70	13	〃

表一 主なピットの法量及び時期

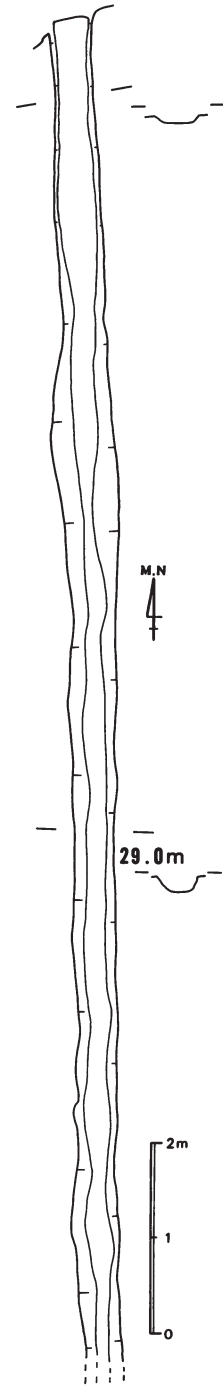


Fig16 SD2実測図

SE 1 (Fig17)

調査区の北端にあり、現地表より60cm下げたところで検出した。検出の段階では、直径2.5mの集石状を呈していたが、中央部の石を剥がすと図示したような井戸の石組となった。石組の内径は2.2mを測る。石組の北半分は整円形をなすが、南半分は歪みが生じている。井戸掘り方は全体の4分の1程度しか明らかにし得なかったが、長軸4m前後の隅丸形状をなしているものと考えられる。石組の石材は大小があるが、すべて砂岩であり最も大きな石は長軸50cm以上を測る。石組は、小口積みで整然と積まれており裏込めには拳大の小石を使っている。井戸は、作業の安全性から底まで深く進むことはできなかった。検出面より2.5mまで下げて断念した。よって深さは不明である。埋土中からの遺物は少ないが、中世の土師器片や馬の歯が3点出土した。中世土師器は井戸が埋没するときに混入したものである。馬の歯も井戸がある程度埋まってから投げ込まれたものであろう。特に祭祀的な性格は考えられない。この井戸の掘られた時期を示す遺物は出土していないが、県下の井戸発掘の資料から考えて近世に属するものである。

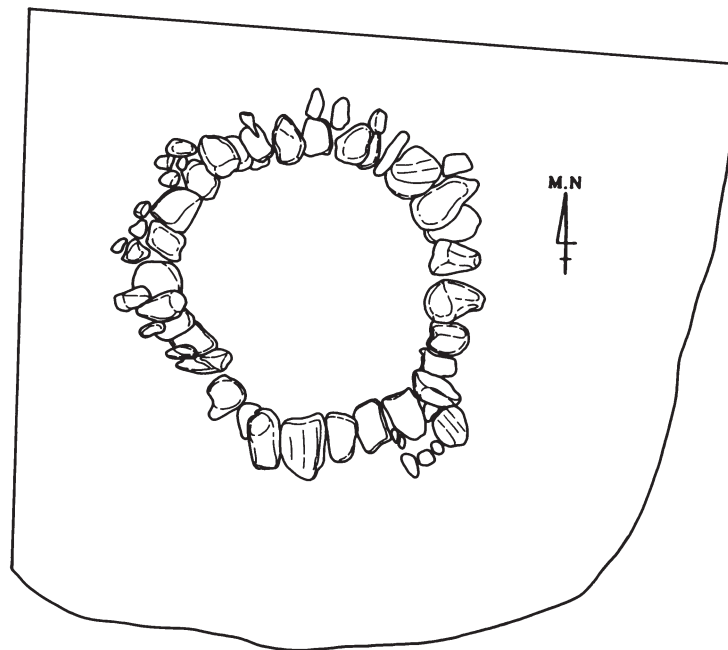
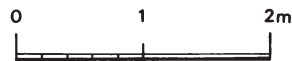


Fig17 SE 1 実測図



(3) 遺物包含層出土の土器 (Fig18・19)

弥生土器 (Fig18)

48は、ラッパ状に外反する壺の口頸部で、口縁部外面に幅1.6cmの粘土帯を貼付している。

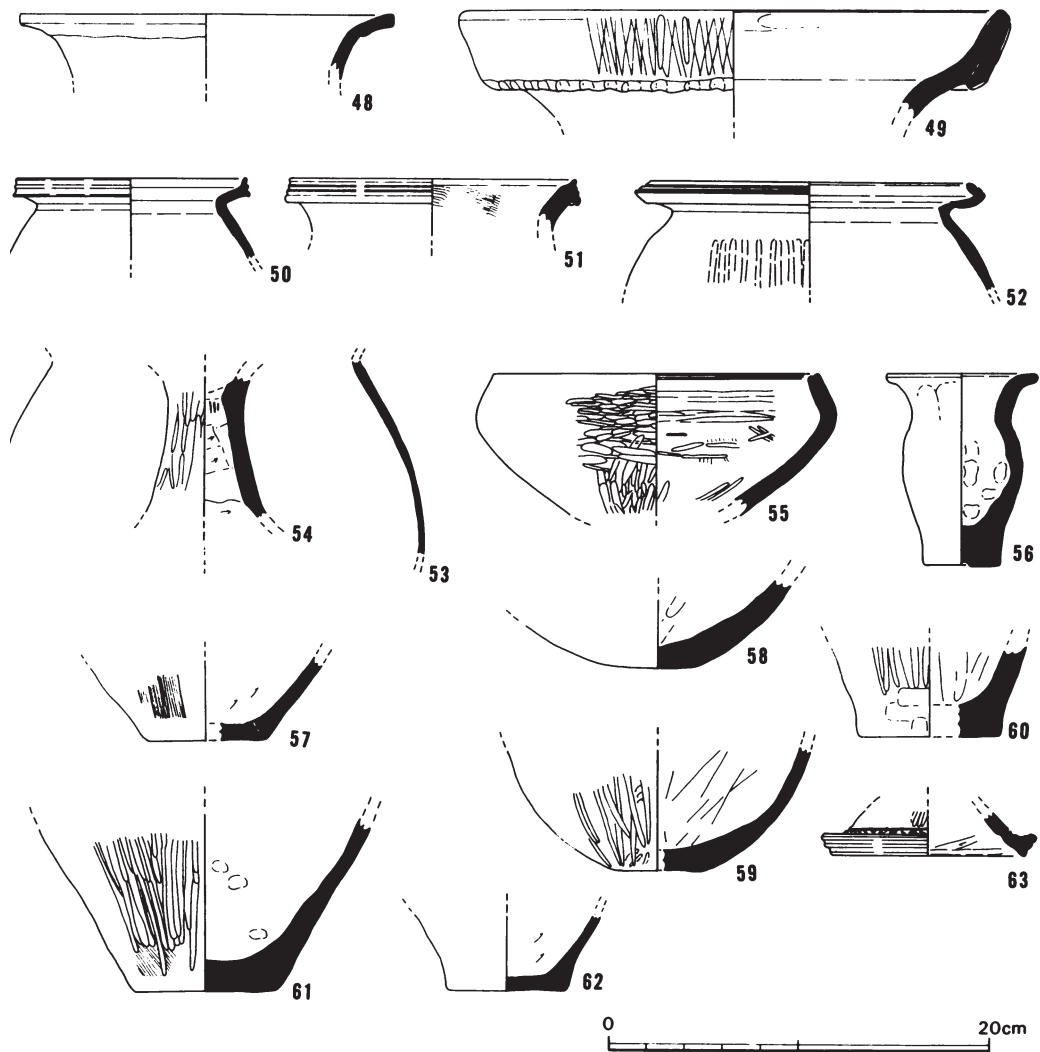


Fig18 遺物包含層出土の弥生土器

49は大型壺の口縁部である。一担外反して立ち上がってから屈曲して再び外方に伸びる二重口縁を有している。外面には幅4.5cm、厚さ0.5～0.8cmの粘土帯を貼付し、各種文様を施している。細いヘラ状原体で斜格子状に沈線を描き、その上に棒状浮文を貼付、僅かに拡張された口縁部下端には太い刻目を配している。また口縁部内面は部分的に強い指ナデを行っている⁽¹²⁾。50～52は、甕の口縁部である。50は口唇部が上方に拡張され、2条の擬凹線が巡る。く字状に外反する頸部内面は横方向の強いナデにより面をなしている。51は口唇部が上下に拡張され3条のしっかりした凹線文が巡る。52は内湾して立ち上がった上胴部から、口縁部は強く外

方に屈曲し内側に折り返された端部外面には2条の沈線が施されている。口縁部内外面の横方向の強いナデ調整、胴部外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。53も甕の上胴部であり、内外面ナデ調整を施す。以上の甕は田村中期Ⅲ（第Ⅳ様式併行）に属する。54・55・56は高坏の柱状部と坏部と脚である。54の外面は丁寧なヘラ磨き、内面は左→右のヘラ削りが見られる。55は丸味を帯びて内湾気味に立ち上がる口縁部を有し、口唇部には細い沈線を配す。内外面丁寧なヘラ磨きを施す。55は胎土中に花崗石や金雲母を含んでおり瀬戸内地方からの搬入品である。63は上方に拡張された端部に2条の凹線文を施し、裾部外面には細いヘラ状原体による横位の沈線1条と斜格子文を施している。内面は左←右のヘラ削りを行う。56は手捏ねの小形壺である。細身の胴部からラッパ状に開く口頸部を有し、内外面指頭圧痕が顕著である。57～62は底部である。57・62は内面ヘラ削り、59～61は外面にヘラ磨きが施されている。このうち59のヘラ磨きは、極めて強く施されており原体の触れた部分が凹状になっている。このことはヘラ磨きの原体が棒状を呈していたことを示している。57・60～62は中期の土器底部である。

須恵器 (Fig19—64～70)

64・65は坏蓋である。54の天井部外面は平坦であるが、ヘラ切りの際に生じた凹凸が残っている。内外面共に横ナデを主体としたナデ調整である。端部は丸くおさめる。65は平坦な天井部から内湾するカーブを描いて口縁部に至る。端部は尖り気味、内外面横ナデ調整を行い、内面にはにぶい赤褐色の顔料を塗布している。66は坏身で、平坦な底部から内湾気味に立ち上がり、受け部は上方を向く。立ち上り部端は尖っている。底部外面はヘラ切り後粗雑なナデ、それ以外は横ナデを施している。67は高台付の坏である。高台は底部外縁付近より外方に張り出すように付けられ、畳付け部分が幅広い。内外面丁寧な横ナデを施している。68は脚部である。端部は丁寧に面取られ僅かに拡張される。透しの切り込みが認められる。内外面横ナデ調整。69は高坏坏部である。長脚二段透しであろう。内湾気味に立ち上がり受け部は上方向き端部は丸くおさめる。外面下半はヘラ削りが施されていたと考えられるが強いナデ調整で消されている。70は中型の甕の下胴部である。丸底で内面には青海波文、外面には平行叩きの上をナデている。

土師器 (Fig19—72・73・77・78)

72は皿状の高坏坏部である。脚部は中実で坏部との接合部に指頭圧痕が見られる。73は壺底部で内面に指頭圧痕が認められる。78は土師器で断面カマボコ状の高台を有し、底部から直線的に立ち上がる。77は鉢で、口縁部は内面に弱い稜をもって外反、端部は部分的に内湾している。内外面は横方向のナデ調整を施すが下半は剥離が激しい。

瓦器 (Fig19—74・79)

74は椀底部で、断面三角形のしっかりした高台を有す。内外面器表の荒れが激しい。79は瓦質鍋である。胴部から内傾して立ち上がり口唇部は凹状を呈する。口縁部外面には断面三角形の鏝が巡り、鏝頂部以外が全面煤けている。

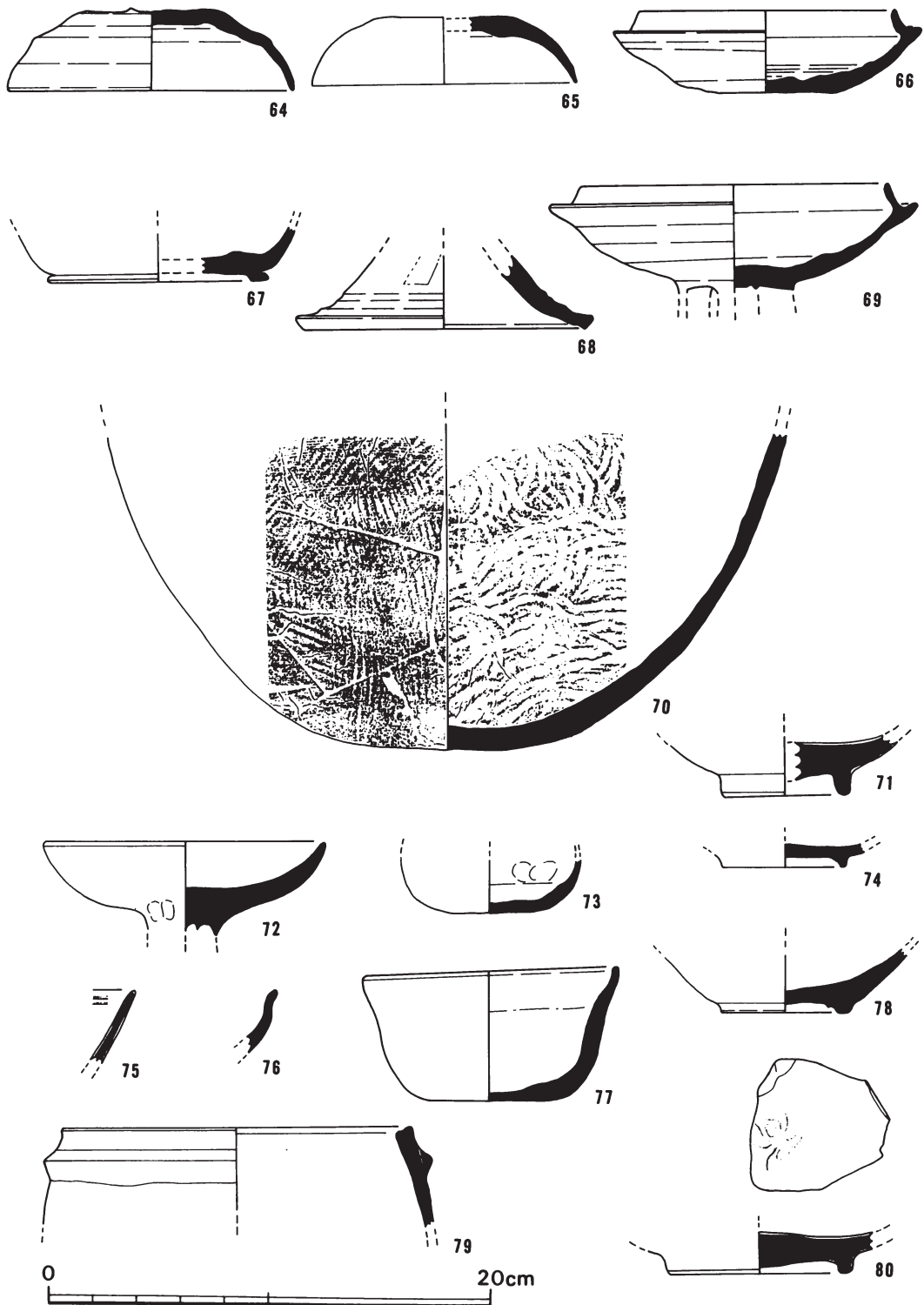


Fig19 遺物包含層及びSD 2 出土の土器
 須恵器(64~70), 土師器(72・73・77・78), 瓦器(74・79), 青磁(71・75・80), 瀬戸天目(76)

青磁・その他 (Fig19-75・76・80)

75は青磁碗の口縁部である。直線的に外方に立ち上がり口縁部は丸くおさめる。内面に2条の沈線が見られるが、縦方向にも分割する沈線に連なるものであろう。釉は透明度のある青灰色、龍泉窯系の青磁碗で大宰府分類のⅠ-4類に属する⁽¹³⁾。80は青磁皿底部である。底部内面に牡丹の印花文が施されている。内外全面に施釉し、外底は蛇目状に釉を削り取っている。釉は薄緑色で貫入がある。76は瀬戸天目茶碗の口縁部細片である。口縁部は直立し端部が外反している。大窯の5期区分に対応させるとⅡ期に比定させることができよう⁽¹⁴⁾。

第V章 考 察

原南遺跡の検出遺構・出土遺物についての個別的な説明を行ったが、ここでは比較的まとまった資料を得ることができた弥生時代の遺構・遺物について若干の考察を行い、原南遺跡の歴史的な位置付けを試みたい。

1 弥生時代中期

中期に属する遺構は、竪穴住居址ST1及びSD3である。両者は共に出土土器から、中期のなかでも第Ⅳ様式併行期に比定することが可能であり、ST1についてはその中でも後半に位置付けることができる。第Ⅳ様式併行期の竪穴住居址は、県下で20棟前後確認されており、その平面形はすべて円形か円形に近い楕円形である。その平均的な規模は直径5～6mで、床面積は30㎡前後の例が多く、前期や後期のものに比べて小振りである。本例はすでに述べたように直径約4.4m、床面積15.2㎡であり、中期のなかでも更に小規模な例として把握しなければならない。

SB1は1間×1間の掘立柱建物址であり、柱根址を明らかにすることはできなかったが、長軸が50cm前後を測る不整形の掘り方を有している。本県における弥生時代の掘立柱建物は、本例を含めて3遺跡21例が確認されている⁽¹⁵⁾。このうち19例までが前期に属するものであり、残る1例が田村遺跡群Loc49で検出した中期の建物である⁽¹⁶⁾。Loc49の例は、2間×3間で床面積6.8㎡、径10cm前後の柱を想定することができる。建物の性格としては簡単な小屋掛け程度のものであろう。今次調査で検出したSB1は、建物及び掘り方規模から考えて高床式の倉庫を想定することが最も妥当であると考えられる。四国地方の弥生時代の掘立柱建物には第Ⅳ様式の時期に大きな画期があり、大型の掘り方を有する高床式倉庫が出現する。そして高床倉庫には、集落の居住空間との関係において2つのタイプが存在する。その1つは、矢ノ塚遺跡例⁽¹⁷⁾に見られるような居住空間から離れた独立した空間に倉庫群を形成するタイプである。他の1例は、文京遺跡⁽¹⁸⁾などのように竪穴住居などと共に存在し居住空間の一部を形成するタイプである。今次調査で明らかとなったSB1は、本県における中期の高床倉庫例と

しては初めてのものであり、その出現は他県の動向と軌を一にするものである。そして高床倉庫のあり方としては後者のタイプ、すなわちST1などと共に集落を構成しているタイプに属する。

土佐山田町における弥生時代の遺跡は中期に出現する。先述のように当遺跡から東北方向へ約20km溯った物部川中流域には前期に属する美良布遺跡があることから、当然土佐山田町にも前期の遺跡が存在していることが考えられる。しかし現状においては未確認である。中期から始まる遺跡は、稲荷前遺跡・原遺跡・龍河洞遺跡であり当遺跡も含めてすべて第IV様式併行期から始まっている。4遺跡に認められる時間的な共通性は、第IV様式併行期が新たな集落成立の画期となったことを示すものに他ならない。高知平野における当該期の最大の集落は田村遺跡群にあり、新たに成立した集落も共通の水派である物部川を通して有機的な関連を持って結ばれていたと考えなければならない。またこれらの集落は、すべて部分発掘でありその全体像を明らかにすることはできないが、立地や周辺的环境から考えて比較的小規模な集落であったことが想定される。おそらく堅穴住居数棟と高床式倉庫とから構成されるものであろう。すなわち経済活動＝水稻耕作における分割経営の単位集団として把握できよう⁽¹⁹⁾。そして母村的存在である田村遺跡群を核に物部川によって結ばれた「相対的」な独立性を保った集落のネットワークとして理解することができる。かかる現象は当該期の生産力の拡大という経済的背景に起因して生じたものと考えられるが、南四国の弥生時代社会の展開を明らかにするうえで注目すべき現象である。

2 弥生時代後期

後期に属する遺構は、SD1のみである。すでに述べたようにSD1の西側半分は、かなり後世の攪乱を受けており遺物の検出状況も原位置を動いていない東側とは大きく異っている。調査範囲が限られているためにSD1の性格を明らかにすることはできないが、東側の埋土の堆積状況は常時水が流れていたことを示す砂粒の堆積は認められない。出土土器や埋土中の大・小の礫のあり方から観てSD1は意図的に埋められたものと考えなければならない。しかも土器から判断して、後期最終末（後期－7期）⁽²⁰⁾の一時期に一気に埋め戻されたものであろう。そして埋土中や検出面近くから復元完形やそれに近い土器が出土していることは、埋め戻しの過程で土器を「投入」したと考えなければならない。大・小の礫においても同じである。本県の前期や中期の溝においては、埋土中層や底面直上から多くの土器が出土する例は見られるが、今回のような出土例を示しているものは初めてである。尤も後期末から古墳時代初頭の集落においては、ヒビノキサウジ遺跡のST8⁽²¹⁾、田村遺跡群Loc12のST1⁽²²⁾、西分増井遺跡群のST8⁽²³⁾などのように特定の堅穴住居に限って多量の土器や河原石が一気に投棄された状況で検出される例がしばしば認められる。SD1の例も、これら堅穴住居の諸例と同様の性格を有するものと考えられるが、その性格の具体的内容については、単なる廃棄であるのか祭祀的な性格を示すものかの判断は決し難い。しかしこれらの諸例のなかで祭祀的な遺物は全く

認められていない。従って現状においては、後期末から古墳時代初頭という限られた時間幅のなかで認められる土器の廃棄パターンとして理解したい。そしてより刮目すべきことは、多量の土器を廃棄した時点を境いに後続する遺構遺物が全く認められなくなることである。廃棄された多量の土器は、竪穴住居の場合一棟での使用量をはるかに凌駕する量を容れている。同時存在した数棟分の竪穴住居で使用されていたものを集めて廃棄されたことを考えなければならぬ。SD1の土器も今次調査区外に存在したことが考えられる竪穴住居から集められ廃棄したものである。そしてこの行為を最後に集落は終焉を迎え、他所に移動している。

高知平野における弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落遺跡は、弥生時代全期間のなかで最も数多く存在し、調査例だけでも10数例を数え、実際の遺跡数になると優にこの数倍は存在するものと考えられる。しかもこれらの集落の出現は決して漸進的ではなく、突発的に現われる傾向にある。そしてその終焉は上述のような経過を辿るのである。いわば忽然と多くの集落が出現し、短期間のうちに一斉に姿を消している。かかる現象が弥生時代と古墳時代の移行期に生じているだけに甚だ興味深い。おそらくこの背景には集落構造の質的な変化を伴う大きな政治的変革があったものと考えられる。

註

- (1) 出原恵三「美良布遺跡の再検討」『土佐史談』177号 1988年 土佐史談会
- (2) 岡本健児「龍河洞の遺跡」『龍河洞』 1974年 龍河洞保存会
- (3) 広田典夫、山本哲也、森田尚宏、角谷和男『公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—原遺跡一』 1982年 高知県教育委員会
- (4) 広田典夫「公共施設設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—原遺跡一」Ⅱ 『高知県文化財調査報告書』第25集 1984年 高知県教育委員会
- (5) 森田尚宏、吉原達生、出原恵三『稲荷前遺跡発掘調査報告書』 1990年 土佐山田町教育委員会
- (6) 岡本健児、広田典夫『高知県ひびのき遺跡』 1977年 土佐山田町教育委員会
- (7) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』 1990年 土佐山田町教育委員会
- (8) 森田尚宏『林田遺跡』 1985年 土佐山田町教育委員会
- (9) 出原恵三「〈土佐型〉甕の提唱とその意義」『遺跡』32号 1990年 遺跡発行会
- (10) 出原恵三「南四国における弥生中期土器の展開」『遺跡』31号 1988年 遺跡発行会
- (11) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20-4 1974年
- (12) 昭和57年度の調査で同様のものが出土している。註(4) 第7図の11
- (13) 森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」 1978年 九州歴史資料館研究論集4
- (14) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986年 瀬戸

市歴史民俗資料館

- (15) 出原恵三「四国の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』本編 1991年 第29回埋蔵文化財研究会
- (16) 出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（山側進入灯設置区域）報告書—田村遺跡群・田中地区—』 1986年 高知県教育委員会
- (17) 香川県文化財保護協会『矢ノ塚遺跡』 1987年
- (18) 『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』古代学協会四国支部 1988年
- (19) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1 1959年 考古学研究会
- (20) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」 『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』
1990年 古代学協会四国支部第4回大会
- (21) (7)に同じ
- (22) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第2分冊
1986年
- (23) 出原恵三『西分増井遺跡群』 1990年 春野町教育委員会

遺物 観 察 表

挿図番号	遺構番号	器 種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形 態 ・ 文 様	手 法	胎土・その他
1	ST 1	壺	18.6 — —		口縁部はラッパ状に外反、口唇部下半にヘラ状原体で刻目。	口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付し、指頭で押える。	1～4mmの砂粒を多く含む（チャートが多い） 内外面明茶色
2	〃	甕	17.4 (12.0) 14.6 —		胴部中位から頸部に向かってすぼまり、口縁部はラッパ状に外反。頸胴部間に1条の小突帯を貼付し指頭でつまむ。	口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付。口唇部は横方向のナデにより凹状をなす。胴部内外面ナデ調整。	1～2mmの砂粒を多く含む（チャートが多い） 胴部外面は、全面煤ける。
3	〃	高 坏	— (12.0) — 12.4		坏部欠損。なめらかに外反しながら下降。端部には2条の凹線文を施す。	坏底部は円盤允填。外面縦方向のヘラ磨き。内面右一左のヘラ削り。 端部近くの内外面は、横方向の強いナデ。	0.5～2mmの砂粒を多く含む。 内外面橙褐色。
4	〃	壺	9 (6.0) 7.4 —		下腹らみの胴部から頸部に向ってすぼまり、口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横方向のナデ調整。頸部以下の内面には、しほり目が認められる。	0.5～2mmの砂粒を多く含む（チャートが多い） 内外面淡茶色
5	〃	甕	16.4 (6.0) — —		口縁部は、外方に強く屈曲。口唇部は上方に拡張。頸部内面に弱い稜が生じ、幅広い面状をなす。	口唇部、口縁部内外面横方向の強いナデ。胴部内外面ナデ調整。	0.5～2mmの砂粒を多く含む。 外面は煤ける。 内外面濃茶褐色。
6	SD 1 (東側)	壺	23.6 — — —		口縁部は強く外反し、端部近くで内湾。口唇部は面をなす。	外面、縦方向のハケ調整。内面上半は横方向のハケ調整。 下半は指頭によるナデ。	0.5～3mmの砂粒を含む。 内外面橙褐色。
7	〃	甕	14.9 — — —		口縁は丸味をもって外反。口唇部は弱い面取り。	口縁部内外面右どり、胴部内外面は縦方向のハケ調整。叩き成形。	1～3mmの砂粒を含む（チャートが多い） 内外面茶色。
8	〃	高 坏	25.0 — — —		坏底部は直線的に立ち上がり、口縁部は直立。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。底部内外面はヘラ磨き。	0.5～1mmの砂粒を含む。 内外面茶色。
9	〃	甕	18.4 — — —		口縁部は内面に稜をなしく字状に外反。	口縁部内面は横方向、外面は右どりのハケ調整。胴部外面は叩きの上をハケ調整。	1～3mmの砂粒を多く含む（チャートが多い） 内面は淡茶色、 外面は灰黒色。 口縁外面は、煤ける。
10	〃	〃	— — — 3.0		わずかに平底が残る。	外面は、縦方向のハケ調整。内面は、指頭圧痕が顕著。 叩き成形。	1～2mmの砂粒を多く含む。 内外面黄茶色。 底部外面は被熱赤変。
11	〃	〃	— — — —		突出気味の底部から、内湾しながら胴部が立ち上がる。	水平方向の叩きの上を右どりのハケ調整。	0.5～4mm大の砂粒を多く含む。 内外面橙褐色。
12	〃	高 坏	— — — 12.2		脚端部は上方に拡張され、2条の凹線文が入る。	内面左一右のヘラ削り。外面ナデ調整。	0.5～3mmの砂粒を多く含む。 内外面桃褐色。
13	〃	甕	— — — 1.8		僅かに底部が残る。	内外面ナデ調整。器壁が厚い。	2～4mmの砂粒を少量含む。 内外面淡桃褐色。

挿岡番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 種 法	胎土・その他
14	SD1 (東側)	甕	13.1 22.5 17.1 1.8		僅かに下腹れの長い胴部。口縁は内面に稜をなして直線的に外反。口唇部は面をなす。僅かに平底を残す。	叩き成形。下半部に分割成形の痕せきが認められる。口縁部叩き出し。内面は胴部中位までハケ調整。	2～5mmの砂粒を含む。(チャート、石英)底部付近に黒斑内外面淡橙褐色。被熱赤変。
15	〃	鉢	13.1 6.3 — 3.7		しっかりした平底から内湾気味に立ち上がる。	叩き成形。口縁部内面ハケ調整。	2～5mmの砂粒を多く含む。内外面橙褐色。
16	〃	ミニチュア 壺	3.5 — — —		長い頸部から口縁部が外反。	内外面に指頭圧痕が顕著。	1mm前後の砂粒を少量含む。淡褐色に発色。
17	〃	甕	17.2 30.0 24.4 —		口縁部は丸味を帯びて外反。長目。丸底で最大径を胴部中位に有す。	叩き成形。胴部外面は水平方向の叩きの土を縦方向のハケで消す。口縁部外面縦方向のハケ調整。頸部直下と胴部断面に粘土帯の接合痕が認められる。	2～5mmの砂粒が多い。内外面橙褐色及び淡橙褐色。底部と胴部に黒斑有り。
18	SD1 (西側)	壺	11.6 — — —		口縁部は強く外反し、口唇部には2条の凹線文が巡る。	内外面横方向のナデ。	0.5mm以下の砂粒が多く、1～2mmの砂粒を少量含む。内外面淡茶色。搬入品。
弥生土器							
19	〃	〃	17.8 — —		ラッパ状に外反する口縁部。口唇部は上下に拡張し3条の凹線文を施す。	口縁部内面ヘラ磨き。外面横方向のナデ。粘土帯接合部で破損。	0.5～2mmの砂粒を含む(チャートが多い)内外面赤褐色。
20	〃	〃	19.4		口縁部は短く、外反度も弱い。外面には厚い粘土帯を貼付し、幅広い口唇部には斜格子文を施す。	口縁部外面に指頭圧痕顕著。内面横方向のナデ調整。口唇部の粘土帯貼付に際しては、擬口縁をハケ調整している。	0.5～2mmの砂粒を多く含む。(チャート・砂岩が多い)
21	SD1 (XIV層)	〃	15.0 — — —		長目の頸部から口縁部はなめらかに外反。外面に粘土帯を貼付。口縁部は凹状をなし刻目を施す。	頸部外面縦方向のヘラ磨き。口唇部は、刻目施文後に横方向にナデする。	0.5～2mmの砂粒を多く含む。内外面明褐色。
22	SD1 (西側)	甕	15.0 — — —		口縁部はく字状に外反。口唇部に向かって肥厚し、2条の擬凹線文を施す。	胴部内外面横方向のナデ。	1～3mmの砂粒を多く含む。内外面橙褐色。
23	〃	〃	18.2 — — —		口縁部は大きく外反、外面に粘土帯を貼付。口唇部は凹状をなし、下半に刻目を施す。上胴部外面に櫛描直線。	内外面横方向のナデ調整。	0.5～3mmの砂粒を多く含む。(チャートが多い)内外面黄褐色。
24	〃	〃	14.0 — — —		口縁部は内面に稜をなしてく字状に外反。	叩き成形。口縁部叩き出し。内面ハケ調整。外面は口縁部のみハケ調整。	1～2mmの砂粒を多く含む。(チャートが多い)
25	〃	〃	13.7 — — —		〃	叩き成形。口縁部叩き出し。口縁部内面ハケ調整。胴部内面は指頭によるナデ。	0.5～3mmの砂粒を含む。内外面黄褐色。
26	〃	〃	— — 22.0 —		〃	叩き成形。胴部外面下半及び内面にハケ調整。また上胴部内面には指頭によるナデ。	2～3mmの砂粒を多く含む。橙褐色。外面煤ける。

挿入番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	胎土・その他
27	SD1 (西側)	甕	— — 20.8 —	— — — —	口縁部は内面に稜をなしてく字状に外反。	叩き成形。口縁部叩き出し。叩きは水平方向であるが、上胴部では、水平方向を右下りの叩きが切っている。内面ハケ調整。胴部中位以下は指頭によるナデ。	0.5～3mmの砂粒を少量含む。 内外面橙色。
28	〃	高坏	— — — 12.0	— — — —	脚端部に3条の凹線文を施す。	内面に左←右のヘラ削り。外面ナデ調整。	0.5～1mmの砂粒を含む。 内外面橙褐色。
29	〃	把手	— — — —	— — — —	断面は隅丸長方形。	全面ナデ調整。	0.5～1mmの細い砂粒。 内外面淡桃色。
30	〃	壺	— — — 7.1	— — — —	下胴部が内湾気味に立ち上がる。	〃	0.5～1mmの砂粒を多く含む。 (チャートが多い) 内面茶色、外面暗灰色。
31	〃	鉢	— — — 3.3	— — — —	丸底風の平底。	〃	鉢か壺の底部。 内外面黄褐色。
32	〃	壺	— — — 7.8	— — — —	平底の底部から下胴部が内湾気味に立ち上がる。	外面縦方向へラ磨き。	1～3mmの砂粒を含む(チャートが多い) 内外面淡茶色。
33	〃	鉢	8.9 — — —	— — — —	内湾気味に立ち上がり、口唇部は面取る。	叩き成形。内面は右下りのハケ調整。	内外面茶色。
34	〃	甕	— — — 4.0	— — — —	突出した底部から下胴部が内湾しながら立ち上がる。	叩き成形。内面ハケ調整。叩きの上をナデ消す。	1～2mmの砂粒を少量含む。 内外面淡褐色。
35	〃	〃	— — — 4.4	— — — —	〃	叩き成形。内面ハケ調整。	1～5mmの砂粒を多く含む。 (チャート・砂岩が多い) 下胴部外面より底部にかけて大きな黒斑がある。
36	〃	〃	— — — 2.3	— — — —	僅かに残る平底から下胴部が内湾気味に立ち上がる。	叩き成形。平行叩きの上を右上りの叩きが切っている。	0.5～3mmの砂粒を多く含む。(チャートが多い)
37	〃	壺	— — — 7.5	— — — —	厚い底部		1mm内外の砂粒を多く含む。 内外面橙色。
38	〃	〃	— — — 8.3	— — — —	底部から外反気味に下胴部が立ち上がる。	外面ハケ調整。内面は板状工具による圧痕が認められる。	1～3mmの砂粒を多く含む。 内面茶色、外面褐色。
39	〃	甕	— — — 9.0	— — — —	厚い底部		0.5～2mmの砂粒が多い。 (チャート・砂岩) 内面黄褐色。 外面灰桃色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	胎土・その他
40	SD1 (西側)	高坏	— — 12.0	— — —	器壁が厚く、脚端部には2条の擬凹線を施す。	坏底部は充填部分から剥離している。 内面はハケ調整。外面は縦方向のヘラ磨き。	0.5～1mmの砂粒が多い。 内外面明茶色。
48	遺物 包含層	壺	20 — — —	— — —	ラッパ状に外反する口縁部を有し、外面に粘土帯を貼付。口唇部は面をなす。	調整など不明。	0.5～2mmの砂粒を含む。 内外面明茶色。
49	〃	〃	28.2 — — —	— — —	受け口状の2重口縁を有する。外面に扁平な粘土帯を貼付し、ヘラ描きによる斜格子と2個1対の棒状浮文を貼付し、口縁下端には太い刻目を配している。	〃	0.5～2mmの砂粒を多く含む。 (チャート・石英) 内面灰褐色、外面赤褐色。
50	〃	甕	12.4 — — —	— — —	口縁部はく字状に外反。口唇部は上方に拡張され2条の凹線文が入る。 屈曲部内面は面をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	0.5mm以下の砂粒を含み、堅緻。 外面淡黄褐色、内面は橙色。
51	〃	〃	15.2 — — —	— — —	口縁部は、僅かに上・下に拡張され3条の凹線文を施す。	内面は右どりのハケ調整。 外面はハケの上を横方向にナデる。	0.5～1mmの砂粒を含む。 内外面茶褐色。
52	〃	〃	17.0 — — —	— — —	内湾しながら立ち上がった上胴部から口縁部は水平に近く外反。端部は上方に拡張され内傾して立ち上がり、2条の沈線が巡る。	口縁部内外面及び屈曲部内面は強い横方向のナデ調整。 胴部外面ヘラ磨き、内面はナデ調整。	1mm前後の均整のとれた砂粒を多く含む。 内外面橙色。
53	〃	〃	— — 23.4 —	— — —	最大径を胴部中位に有し、上胴部は直線的に立ち上がる。	胴部内外面ナデ調整。器壁がうすい。	〃 外面は煤ける。
54	〃	高坏	— — — —	— — —	脚柱状部で、坏底部は円盤充填。	外面縦方向のヘラ磨き。左→右にヘラ削り。	内外面茶褐色で精選された胎土、搬入品である。
55	〃	〃	17.4 — — —	— — —	内湾しながら立ち上がる坏底部から、口縁部は丸味を帯て内側に立ち上がる。口唇部には一条の細い沈線が入る。	内外面ヘラ磨き。下地にはハケ調整がある。	0.5～2mmの砂粒を含む。(火筒岩・金雲母) 内外面茶色。 搬入品。
56	〃	壺	8.0 10.2 6.4 4.0	— — — —	細身の胴部から、頸部が直線的に外方に立ち上がり、口縁部は短く外反する。	外面はナデ調整。内面は指頭圧痕が顕著。	0.5～1mmの砂粒を含む。 内外面暗褐色。
57	〃	〃	— — — 6.2	— — —	下胴部は直線的に外方に立ち上がる。	外面ハケ調整。 内面下→上のヘラ削り。	0.5～3mmの砂粒が多く含まれる。
58	〃	底部	— — — 2.5	— — —	丸底風の平底。	内外面ナデ調整。	1～3mmの砂粒を含む。 (チャート・砂岩)
59	〃	壺	— — — 4.5	— — —	下胴部は内湾しながら立ち上がる。	叩きの上を磨く。内面は木理の細い原体によるナデ調整。	1～2mmの砂粒。 (チャートが多い) 外面煤ける。
60	〃	〃	— — — 7.2	— — —	厚い底部から下胴部が直線的に立ち上がる。	外面は縦方向のヘラ磨き。下端は板状工具でおさえつける。 内面は指ナデ。	0.5～2mmの砂粒を多く含む。 内面灰褐色、外面灰色。

挿入番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	胎土・その他
61	遺物 包含層	壺	— — — 7.0	— — — 7.0	下胴部は直線的に外方に立ち上がる。	外面はハケ調整のうえをヘラ磨き。	1～2mmの砂粒を含む。 下胴部に黒斑がある。
62	〃	〃	— — — 6.1	— — — 6.1	下胴部は、一旦外反りした後、内湾気味に立ち上がる。	外面はナデ調整、内面はド→上のヘラ削りの上をナデている。	1～2mmの砂粒を含む。 下胴部から外底にかけて黒斑あり。 内外面桃褐色。
63	〃	高 坏	— — — 10.2	— — — 10.2	脚端部は上方に拡張され、2条の凹線文が巡る。外面裾部には1条のヘラ描沈線を引きその下に同原体による斜格子文を施す。	外面はヘラ磨き。内面はヘラ削りを施すが、端部付近は横方向のナデ調整。	1mm内外の均整のとれた砂粒を含む。 内外面橙褐色。
土 師 器							
41	s k 1	坏	— — — 11.0	— — — 11.0	僅かに内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	内面はロクロ目が顕著。 外面は横ナデ。	砂粒をほとんど含まない。 内外面淡褐色。
43	S D 1	〃	— — — 7.3 1.8 — 4.5	— — — 7.3 1.8 — 4.5	〃	〃 糸切り底。	〃
44	〃	〃	— — — 12.0 4.0 — 5.3	— — — 12.0 4.0 — 5.3	〃	内外面共にロクロ目が顕著。 糸切り底。	〃
45	〃	〃	— — — 13.0 4.0 — 4.8	— — — 13.0 4.0 — 4.8	〃	外面は、ロクロ目をナデ消している。 糸切り底。	〃
46	P 14	椀	— — — 高台径 6.1	— — — 高台径 6.1	高台は、やや低い逆台形状をなす。	調整は不明。	砂粒をほとんど含まず精選された胎土、淡桃色に発色。
72	遺物 包含層	高 坏	— — — 12.8	— — — 12.8	坏部は皿状を呈し、柱状部は中実。	坏部と脚部の接合部付近外面には指頭圧痕が顕著。	0.5～4mmの砂粒を多く含む。 内外面明茶色。
73	〃	壺	— — — —	— — — —	丸底。	内面には指頭圧痕が顕著。	0.5～3mmの砂粒を多く含む。
77	〃	鉢	— — — 11.5 6.0 — 5.5	— — — 11.5 6.0 — 5.5	口縁部は外反した後、端部で内湾。 内面に弱い稜が生じている。	口縁部内面は横方向のナデ、胴部内面は斜あるいは横方向のナデ調整。 外面は剥離が激しい。	1～3mmの砂粒を含む。 底部外面及び下胴部の一部に黒斑。
78	〃	椀	— — — 高台径 6.0	— — — 高台径 6.0	断面カマボコ状の貼付高台。 下胴部は、わずかに内湾しながら立ち上がる。	調整は不明。	0.5～1mmの砂粒が多い。
須 恵 器							
42	S K 2	坏	— — — 9.2 3.1 — 6.6	— — — 9.2 3.1 — 6.6	底部から丸味を帯びて立ち上がり、直線的に外方に伸びる端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ。ヘラ切り。	0.5～2mmの砂粒を含む。 内外面灰色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	胎土・その他
47	P 63	坏蓋	12.0 — —		端部は丸くおさめる。天井部との間に弱い段が生ず。	内外面横ナデ。ヘラ切り。	1～2mmの砂粒を含む。 内外面灰色。
64	遺物 包含層	〃	13.2 3.6 —		天井部外面には、ヘラ切りの際に生じた瘤状の粘土が残る。端部は丸くおさめる。	内面横ナデ。 外面横ナデを中心とするナデ調整。	〃 内外面暗灰色。
65	〃	〃	12.2 3 —		天井部外面は平坦な面をなす。端部は尖り気味。	全面横ナデ。内面には赤褐色の顔料を塗布。	〃
66	〃	坏身	11.7 3.7 —		平坦な底部から内湾気味に立ち上がる。受け部はわずかに上方を向き、丸くおさめる。立ち上がりは、外反りで端部は尖る。	底部以外は横ナデ。 内面には成形時に生じた凸凹が残る。	0.5～1mm前後の砂粒。 内外面灰色。
67	〃	坏	— — — 10.0		高台は畳付けが幅広くつくられ、外方に張り出している。底部から丸味を帯びて立ち上がり、直線的に外方に伸びる。	内外面丁寧な横ナデ。	〃
68	〃	高坏	— — — 13		脚端部は面取る。方形の透しが穿たれる。	内外面横ナデ。	精選された胎土。 内外面灰色。
69	〃	〃	14.0 — —		長脚で長方形の透しが付く。受け部は直線的に外上方に伸び、立ち上がりは端部付近で僅かに外反。	内外面横ナデ。	0.5～1mmの砂粒。 内外面灰色。
70	〃	甕	— — —		丸底の底部から内湾しながら立ち上がる。	内面青海波文。外面平行叩きの上をハケ及びナデ仕上げ。	〃
青磁							
71	S D 2	椀	— — — 高台径 5.6		底部は厚く、畳付けは丸くおさめる。		灰白色精緻な胎土で、緑濁色の釉が厚くかかる。外底露胎部は僅かに褐色。
75	遺物 包含層	〃	— — —		直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。11縁内面に2条の巻線が巡ぐる。		灰色精緻な胎土で、透明度のある灰色の釉。
80	〃	皿	— — — 高台径 8.2		内底に牡丹の印花文。	内外面施釉し、外底は蛇目状に削り取る。貫入あり。	灰色でやや粗い胎土。釉調は薄緑色。
その他							
74	遺物 包含層	瓦器碗 底部	— — — 高台径 5.7		断面三角形の高台。		0.5～2mmの砂粒を少量含む。 内外面灰白色。
76	〃	天茶 目碗	— — —		11縁は垂直に立ち上がり、端部近くで短く外反。		胎土はやや粗く、淡灰色に発色。11縁は灰色の釉。以下は黒色の鉄釉。
79	〃	瓦質 鍋	— — —		内傾して立ち上がり、11縁下に断面三角形の罫。11唇部は凹状をなす。		0.5mm前後の砂粒が多く、中に5mm大の小礫が入る。

圖 版



調査前の全景（北西から）



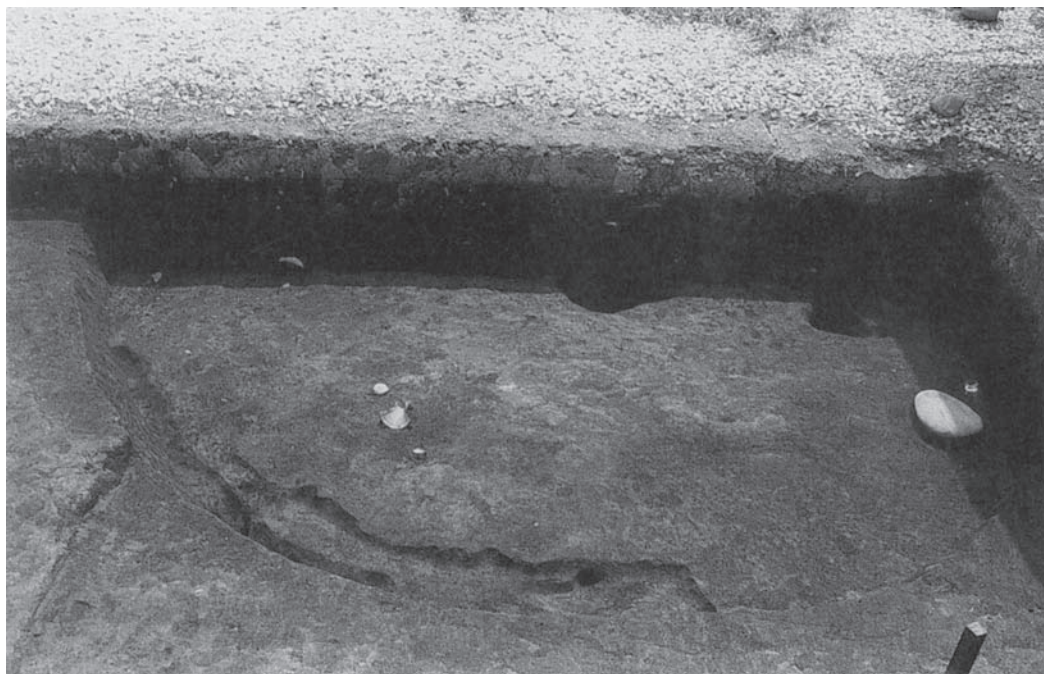
完掘状態（東側半分）



完掘状態（西側半分）



完掘状態（仮設校舎部分）



ST 1



ST 1 (仮設校舎部分)



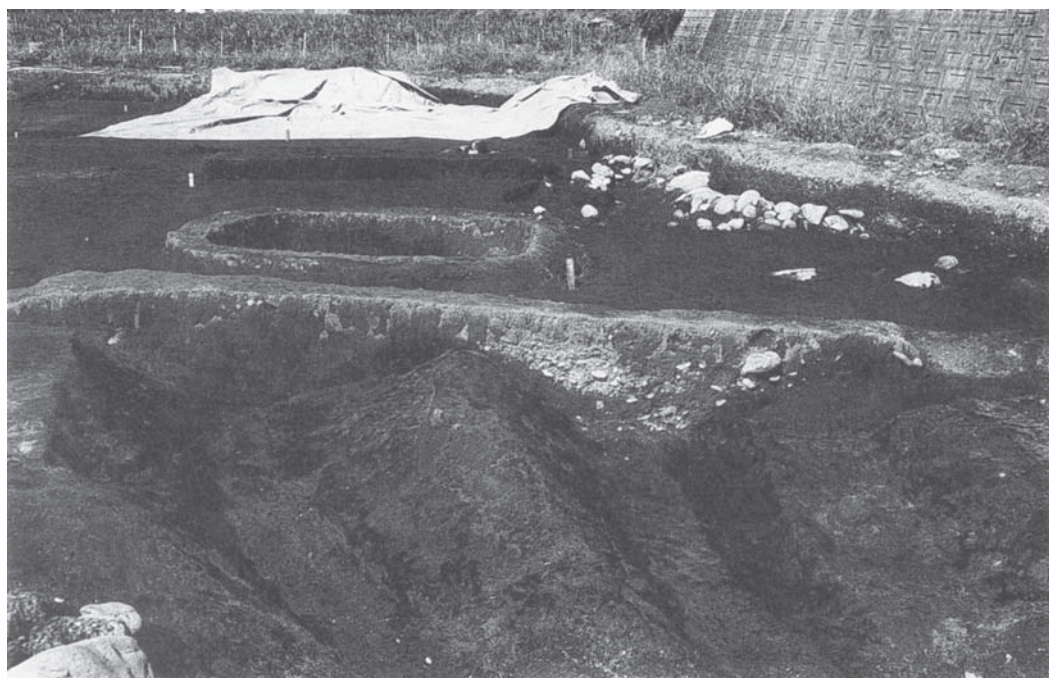
SD 1 東側半分 (西から)



同 上 (東から)



SDI B-Bバンクセクション



同上 A-Aバンクセクション



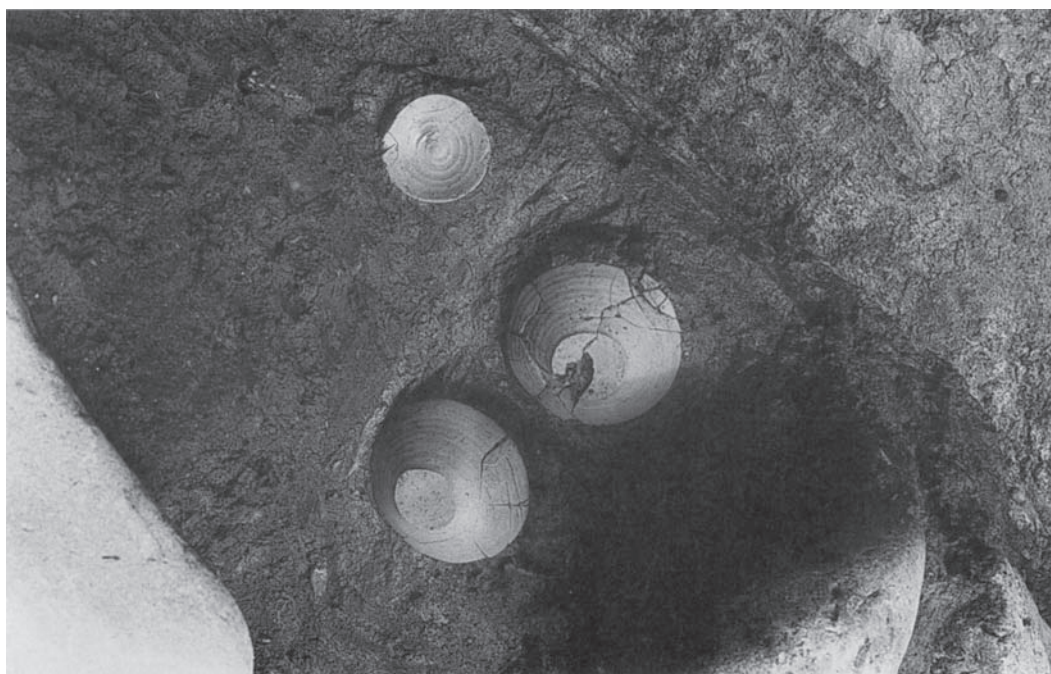
SD 1 土器出土状況(17)



同 上



SD 1 土器出土状況(14)



同上 (43・44・45)



包含層(IV層)出土の土器(61)



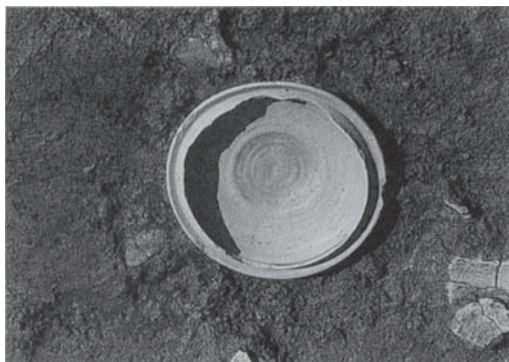
SK 2



SE 1



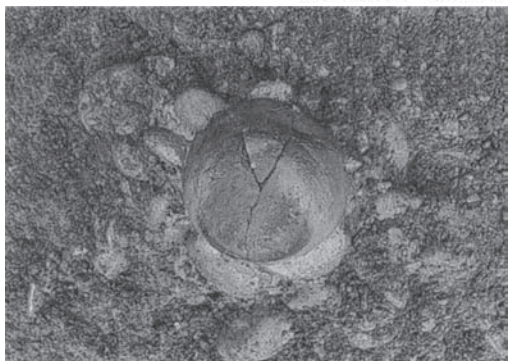
SE 1



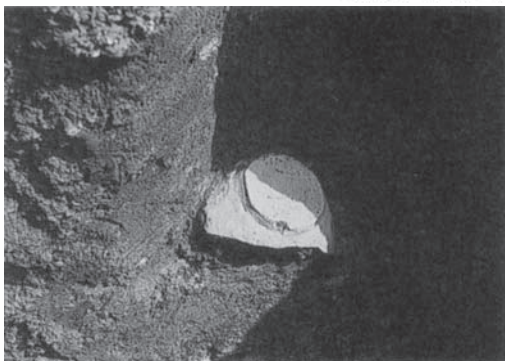
須惠器高坏 不部(69)



須惠器坏盖(64)



工師器鉢(77)



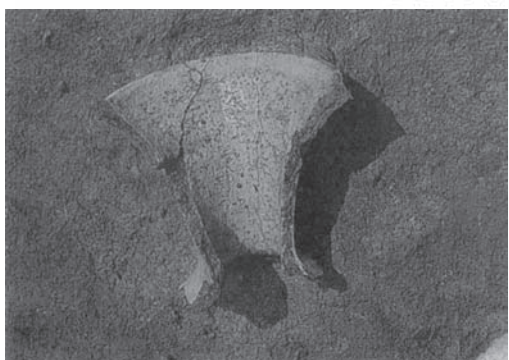
弥生土器壺底部



須惠器坏(66)



弥生土器高坏脚部(40)

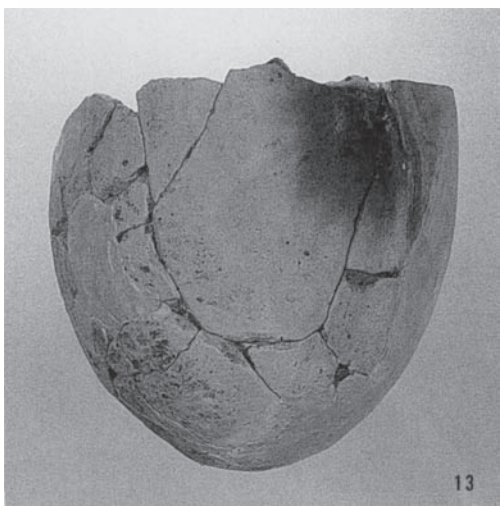


弥生土器高坏脚部(3)

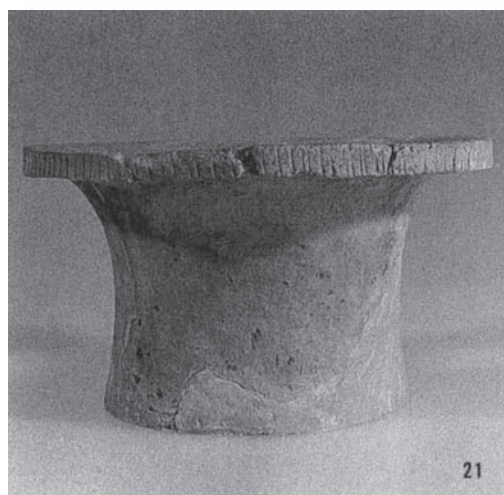
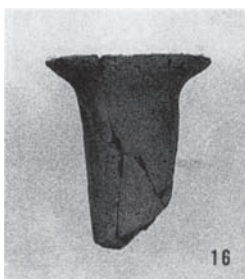


弥生土器甕(52)・高坏坏部(55)

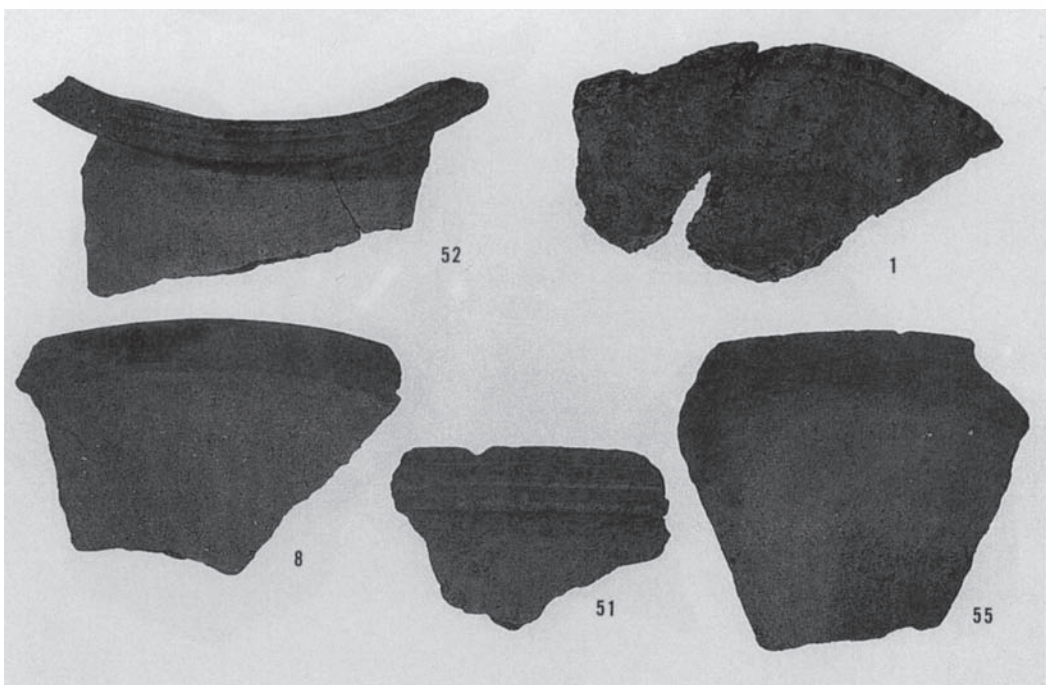
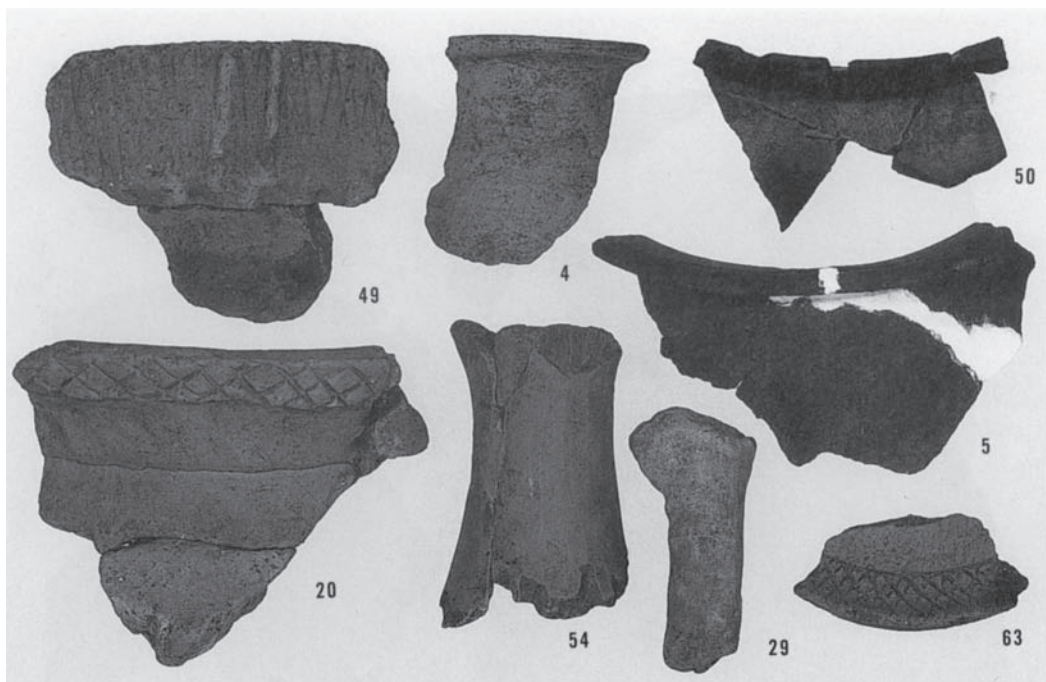
土器出土状况



出土土器 写真図版



出土土器 写真図版



出土土器 写真図版



出土土器 写真図版

高知県文化財団埋蔵文化財調査報告書第1集

高知県土佐山田町

原南遺跡発掘調査報告書

1991年3月

発行 高知県文化財団
南国市岡豊町八幡字岡豊山1099-1
TEL (0888) 62-2211

印刷 有限会社西村謄写堂
高知市上町1丁目6-4
TEL (0888) 22-0492